
異世界で聖霊少女とフリーダム！

くろぬこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で聖霊少女とフリーダム！

【コード】

N1004W

【作者名】

くるぬい

【あらすじ】

気づけば異世界に飛ばされた高校生の少年と

その少年の記憶の一部を持つ聖霊少女達とのドタバタ劇（予定）

すべての聖霊少女達が揃いし時、異世界の住人達をも巻き込んだフリーダムでカオスな物語になる予定（笑）

基本的にその時に思いついたネタを書いているのでかなり不定期更新になります。

習作です。小説を書く練習のつもりで書いてます。

処女作で自由な作風なため、読みにくい点が多々あると思いますが、

それでも良いぞ！っていうかたは宜しくお願いします。

（挿絵も描いてますが、ほとんどが元ネタ有りのパロ絵です）

【序章】登場人物紹介・用語補足（前書き）

作者の脳内は常に桃色お花畑です。

> i 3 3 8 7 3 | 3 9 9 3
<

【序章】登場人物紹介・用語補足

登場人物紹介

・本条 拓也ほんじょう たくや

黒目と黒髪のどこにでもいる普通の高校生。

卒業式に3年間片思いだった憧れの女性に告白するが

気付けば魔法や聖霊や魔王だとか訳の分からない異世界【フレードム】へ飛ばされていた。

口下手。人見知りが激しいが、自分の分身である聖霊には気さくに話す。

趣味は読書、ニコニコする動画鑑賞。

早く元の世界に帰りたい。

・火霊ヒレイ

火の聖霊。

【封印の間】といわれる場所に1000年に渡り、聖剣と共に封印されていた聖霊。

拓也たくやが聖剣を抜いた事によりこの世界に出現した。

紅色の瞳と髪。（髪は首の後ろ辺りで縛ったツインテール）

火のエーテル（魔法の素）で構成され、少女の姿となっている。

聖剣に選ばれし者を真の聖剣の使い手になるよう

導く役目を持っていたはずのだが・・・

口癖『私は主様の事を性欲の対象にしか見てません』（真顔）

拓也たくやの股下の性剣にしか興味が無い変態せいわい。

頭の中は常に桃色お花畑。

得意なのは聖獣召喚の中でも最高難度の竜召喚（火竜）

『中二病』という異世界には存在しない
無属性魔法(?)を使える。

> i 3 1 5 7 6 | 3 9 9 3 <

・ルメリア(光国の姫様・第一皇女)
髪は長く、白髪。(白髪は光国出身者の特徴である)
陽の光を浴びるとキラキラと光り、白金と例えられる。
笑顔を絶やさず、おしとやかでありながらも
常に明るい性格から国民の人気も高い。
しかし、聖剣復活により今まで築いてきたものが
無残にも崩壊していく。

・リディア(光国の王妃)
ルメリアの母。竜姫。
火国出身。
髪と瞳は赤。
竜と戦った時に左目を負傷。(当時12歳)
火国の王で有り、竜王と呼ばれる現国王の弟の娘。

・フウリン・メイ(光国の城に仕えるメイド)

拓也たくやの身の回りを世話してくれるメイド。
城のメイドの中ではただ一人の風国出身のメイド。
明るい緑色の髪と瞳が特徴的。

・ダイナ

光国こうこくの城に仕えるメイド長。

赤髪。火国ヒコク出身。

・魔王

3年前に竜の大群を操り火国ヒコクを襲撃。

目撃者によると黒髪に黒目の少女の姿をしていたと聞く。
髪と瞳が黒という人間は異世界には存在しない。

・アラン（元竜王親衛隊の隊長）

リディアの師匠でも有り育ての親とも呼べる人。

亡きリディアの父の親友。火国ヒコク出身。

リディアの唯一尊敬する人。

竜王親衛隊の隊長という身分でありながらも竜王の事は嫌っている。
リディアと同じ年の子供がいる。

・火国ヒコクの第一皇子

現竜王親衛隊の隊長。

歳はリディアの2つ年上。

最年少記録を持つリディアへの競争心から

15歳の時に竜殺しに挑戦したと言われている。

・又シフェル

火霊ヒレイの妄想世界に住む墮天使。

背中から黒い翼を生やしている。

ちなみに服は着ておらず、裸。

拓也たくやと同じ姿をしており、火霊ヒレイの

主あのじに対する悩みをやさしく聞いてくれる

ありがたい存在。

彼曰く自分は”ツンデレ”という種族の

デレ属性を持つ墮天使とのこと。

又シフェル『そんな妄想で大丈夫か？火霊ヒレイ』

用語補足

・聖剣

伝承によると【封印の間】に1000年以上前から封印されていたとのこと。

拓也たくやの身長と同じくらいの高さが有り、振り回すのにはかなりの訓練が必要である。

鐔つばには聖石をはめるための8つのくぼみがある。

成人男性程の重さが有り、剣というよりは鈍器のイメージが強い。

・聖霊

異世界に存在するエーテル（魔法の素）が人の形を持ち、さらには意思をもったもの。

（召喚者の一部の記憶をベースに構成されている）

特徴としては

（1）エーテル（魔法の素）で構成された体なので通常の攻撃では傷をつけることすら不可能。

（2）魔法を唱えるためには

詠唱 構築式の完成 魔法という手順なのだが、その過程を完全に無視して魔法を好きなだけ使える。

（ノーモーションで上級魔法を連発し放題。）

（3）聖獣を召喚する魔法はあるのだが、これはあくまで異世界に存在する

生物の形をした魔法を出現させただけであり、意思をもっているわけではない。

・異世界【フレードム】の世界地図

氷

火 水

光

風 土

雷

・光国 コウコク

拓也たくやが聖剣を抜いた【封印の間】がある国。

・火国ヒコク

7国の中で武力においてもっとも大きな力を持つ国。
本世界で最強とされる生物である竜を倒す程の実力者が多く、竜人と例えられる。

3年前、突如現れた魔王の襲撃により中心地は大きな被害を受ける。

・古竜コリウ

1000年以上前から生きていると言われる竜。
溶岩マグマの中を泳ぐ事もできる程の硬い鱗を持ち、
火国ヒコクの竜人と呼ばれる実力者達の魔法を受けても傷一つ付けられない。

過去に聖剣の勇者との約束により異世界の人々には不干涉という状況であるため
そこまでの脅威は感じられていない。

ただし、大切な卵を壊そうとする者達には容赦なくその牙を向ける。

第1話 スポツ！

今から3年前

『まずいことになったな……』
眉間に皺を寄せ、苦悶の表情を浮かべ白髪の男性がため息をつく。
普段から苦勞を抱えてるためか老け込んでるようにも見える。

コンコン

ガチャ

ドアを開ける音がして、一人の少女が入って来る。

『失礼します。父様、先ほど火国の使者が参られたようですが、何かあったのですか？』

『ああ、ルメリアか……』

父様と呼ばれた男性は部屋に入ってきた娘に気付き、顔をあげる。
(ふむ。髪の色は私と同じだが。面影は母親に似てきたな)

その髪は白であるが、陽の光に当たるとキラキラと輝くことから、
白金ブリチナと例えられる事が多い。

『実はな……』

男性は使者から渡された手紙の内容を少女に伝える。

『そんな……まさか』

少女の顔が青ざめる。

間違いなく校内ではトップクラスの美人ではあるが周りと話している所を

見た事は無く、まったくこんな良物件を逃すとはこの学校の男性共は何を考えてるんだ!と思った。

でも、余計な虫が近づかないから自分的には良いんだけどねえ……と妙な理屈で納得してしまう自分がいる。

学校ですれ違う度にその長い黒髪が綺麗になびくのが印象的だった。

触ればきつとサラサラなんだろうな……といつも思っていた。

声を掛けようと決心した事もあったが何を話して良いか分からないし

口下手なため会話も続かないだろうと思いつい結局断念していた。

卒業すれば二度と会えないかもしれない。

これは最初で最後のチャンスだろう。

とりあえず、校舎の人目につかない所に来てもらい、今の自分の想いの

すべてを伝えた所だ。

緊張し過ぎて声を掛けたあたりから記憶はすでになく、

自分が何を言ったのか思い出せない。

リアルは脳内シミュレーション通りにはいかないようである。

分かってはいたんだが……

きつと断られるんだろうなと自嘲気味な笑みを浮かべはあとため息をつく。

『嬉しいです』

一瞬の沈黙の間があった。

『えっ?』

予想もしない答えである。

彼女は本当に嬉しそうに蔓延の笑みを浮かべている。

(あれ?まじで!?)

本当に予想もしてない展開である。

いや、嬉しいっちゃ嬉しいんだけど……と思いつつ

何か裏でもあるのかな?とひどい思考が始まる。

物事がうまくいきすぎると素直に喜べず、逆に疑ってしまう

このネガティブな癖はなんとかしたい。

『やっと、愛してくれるのですね?』

『はっ?』

愛する?はて、俺の聞き間違いか?

確かに愛の告白ではあるが、愛するとかは大袈裟過ぎないか?

『3年間、ずっと待っていました』

(待っていた……だと?)

もはや、驚きを隠せない。

今の俺はどんな表情をしているのだろう。

少女の差し出した手が少年に触れる。

『ぬしさま
主様』

聞きなれない言葉が耳に入った瞬間。
世界が突然、黒に染まった。

『……………』

状況が飲み込めない。

『……………』

今まで見えてた青空が見えない。

『……………』

照明が消えたとかのレベルでは無い。

ここは外だ。しかも、昼間。

ありえない。

だが、俺の目の前は真っ暗だ。

一瞬、俺の目が失明したのかとあせった。

慌てて、何か無いのかと手探りでその辺を探す。

『何が起きた……………どうなっている？』

動揺を隠しきれない。光はどこだ？照明は無いのか？

そう思って必死に探していると、手に何か触れた。触った感じ棒状のようなモノである。それを握り動かそうとすると、何かひっかかりを感じた。

『何だコレ？』

そう思って力を込めて引き抜こうとしたら、ズボッとあっさり抜けた。

『……剣？』

そうだ、確かに剣の形をしている。そう思ってそれを眺めてる時に気付いた。

(ちょっと待て、なぜ俺は今これが剣だと分かった)

そして、急に明るくなった事に気づく。視線を上に移動させると目の前には大きな鱗うろこのようなものが見えた。

どうやら、それが発光しているようだ。

これのおかげで室内が明るくなったようだ。

その鱗うろこのような大きくて長いモノを目で追い、気付けば天井を見上げていた。

そこには、蜥蜴とくげを思い出すような顔をした何かが自分を見下ろしていた。

『どついついことですか？』

【封印の間】に到着すると本来開いてるはずのない扉が本当に開いていた。

中の状況はどうなってるのかと中に入って、下をのぞいた。

この建物は地下に向かって深く掘られた構造になっており、円柱状の建物の壁に沿ってらせん状の階段が地下深くまで伸びている。

その階段の手すりから見下ろした先には竜がいた。

正確には召喚魔法の類で出来た聖獣であろう。

火の魔法が竜の形となって召喚されている。

この場合、火竜とでも呼べばいいのだろうか。

しかし、竜を召喚するのは聖獣召喚の中でも最も難しいとされるモノである。

火国から我が国に派遣されている上級魔導士でさえ実際に召喚し、操れる者は何人いるのだろうか？

だが、そんな事は考えている暇は無い。

聖獣がいるということは強力な魔導士、もしくはそれ以外の何者かがいるということだ。

(何者が……！？)

白髪の少女が火竜の首元にいる何者かに気付いた瞬間。

火竜の首が暴れだした。

ブオオオオオオオオオオ!

その口から大量の炎を吐き出し、建物の天井は火の海となっていた。

火竜が火を吐き出した瞬間、身の危険を感じた少女は瞬間的にそこから飛び降りた。

普通の人なら足の骨が折れても良いような高さから着地したが少女は何事もなかったかのように顔を上げる。

『母様……あなたかあさまの娘である事に感謝致します』
ボソリと独り事を言った後、少女は竜の首元にいる者に駆け寄った。

『おいおい、マジでコレなんだよ』
状況がまったく把握できない。
とりあえず、蜥蜴みたいな顔のでかくて長い首が大きく左右に揺れている。

俺も首まで土を埋められたら、こんな感じで外にでようともがくんだろうか。

割と冷静な判断の思考に驚きつつもその視線の先のモノに釘づけになっていた。

『何をしてるんですかっ!』
耳元で突然、聞こえた叫び声に驚いて声の方向に振り向く。

そこには自分の腕を掴み必死の形相で少年を睨む白髪の少女がいた。

(白髪……苦勞が多いのかな?)

と、またもや訳の分からない思考が始まる。

『あなたがこの聖獣を召喚した者ですか!?

一体何を考えてるのですか!?!』

自分の腕の服を強く握り締めブンツブンツと揺される。

(えっ?えっ?えっ?)

(何で俺が怒られてるの?)

訳が分からない。

『早くこれを止めて下さい、でないと大変な事に……!?!?』

少女が彼の足元にある剣に気付く。

『これは?』

【封印の間】の最下層の中心に深く刺さってる剣。

その剣先のすぐ隣に、過去に剣を刺したような跡が

一瞬目に入ったが今は深く考えなかった。

『これが伝説の聖剣?』

実物を見るのは初めてだった。

伝承にのみ伝えられる伝説の剣であり、その形はその時々により違っ。

【封印の間】にあるとされているが、その時が来るまでは何人も入ってはならぬと

されているため、【封印の間】に入る事自体が初めてなのだ。今、立ってる少年の胸元あたりまでの長さがある。刺さっているからもう少し長いのかも知れない。

ブオオオオオオオオオオ!

びくっ!

火竜から吐き出された炎の息吹の音で、今の状況を思い出す。今はこんなことをしている場合では無い。

『兎に角この状況を何とかしないと』

(この火竜をまず消すためには)
動揺し過ぎて、まともに思考が働かない

『あ、あのさあ……』

少年がこちらに声を掛ける。

『少し静かにして下さい!』

ぐうっ! 駄目だわ、どうすれば良いの?

火竜を封印するなんて今の私の力では……』

うん。うん。と思考を巡らし、この状況を解決できる最適な答えを探す。

そもそも、この少年はどうやってこの火竜を召喚したのか?

よくよく考えてみれば、なぜ少年が私達王族の者でしか開けることができない

【封印の間】に入ることができたのか?

なぜ？

なぜ？

何かがおかしい？

『あなた、どうやってこの火竜を召喚したの？』
一番、最初に思った疑問を聞いてみた。

『召喚？』

(召喚って言えばファンタジー系のゲームとかで聞く言葉だな。
竜とか空想上の生き物を出現させる的な意味合いの)

そう思って、自分が少女から竜と言われるモノ。

それが出てきたと思われる原因を思い出すために今までの記憶を
辿り、
それを実行した。

少年は剣の柄を握り締め。

『召喚っていうか、こうやってこの剣を抜いたら……』

ズボッ

聖剣を抜いた。

伝説の聖剣が抜けた。

その手に聖剣と言われた長剣を持った黒髪の少年も天井を見上げる。

少女に火竜と云われたそれは何かを伺うようにこちらを見ている。

火竜と少女と少年による睨み合いがしばらく続き、

黒髪の少年はふとした疑問を口にする。

『降りて……来ないね？』

『確かにそうですね、攻撃をしてくるわけでもなく様子を見ているだけという感じですよわね』

白髪の少女が眉を潜めつつ、しばらく長考する。

『もしかしたら、召喚者の指示を待ってるのかも知れませんね』

『指示？』

『はい』

白髪の少女は隣にいる少年を見る。

『もしあなたがあの火竜の召喚者だというなら』

『あなたの意志に従う可能性があります』

『例えば？降りて来て下さいとかでも言えば良いの？』

『そうですね、何でも良いので……！？』

少女が何かを言おうとした瞬間、天井近くで飛び続けていた火竜が突然こちらに向かってくる。

少年と少女は身構え、ぶつかると思った所まで火竜が来た瞬間【封印の間】はまぶしい光に包まれた。

そして、その光は人の形を作った。

二人が目を開けたその先には一人の少女がいた。

燃えるような紅色の瞳と長い髪をなびかせ、白髪の少女を一瞥、そして黒髪の少年を見てニコリと微笑む。

『火竜が人の姿に……もしかして聖霊？』
白髪の少女が聞きなれない言葉を口にする。

だが、黒髪の少年の意識は違う所にあった。

（髪が赤……そして、下の毛も赤）

そう、少女は裸だった。

（公然わいせつ罪だな……露出狂か？）

第2話 性霊

【封印の間】と言われた場所でのドタバタ劇がとりあえず終わり、白髪の少女に従い少年は客室と呼ばれる所に移動した。

『改めて自己紹介をさせていただきます』

私はこの国の皇女、ルメリアと申します』

(あゝこの人、お姫様だったんだ)

後ろの窓から差し込んだ陽の光に、その長い白髪はキラキラと輝く。

『あの、お名前を伺っても宜しいでしょうか?』

『え?え?あ!え〜と、じ、自分は本条ほんじょう 拓也たくやって言います』

あつ!?!拓也たくやで呼んでもらって良いです』

あまり見ないタイプの女性だったため、つい見とれてボーッととして急な問いかけにどまついてしまった。

『タクヤ様ですか?』

こちらにはどのようなようにして来られたのでしょうか?』

白髪の少女にたずねられるが、正直自分でもまだよく分かってないため

答えるのに困ってしまった。

とりあえず、自分が分かる範囲でここに来る直前の事を話してみ

『はあ……ガツコウですか？聞いたことが無い地名ですわね』

しばらくお互い要領を得ない会話が続き、結局お姫様には分かったような分からないような表情をされてしまった。

たぶん、分かってないんだろうなと思った。

訳の分からない状況が連続して発生して混乱していたが、時間が経つにつれ

少しずつだが思考が冷静になってくる。

これ以上は何を説明しても無意味だろうなという空気になり、もう話すネタもなくなってきたので、個人的に気になった事を聞いてみた。

『え〜と、さっき聖剣とか言ってたけど……』

あつ、言ってしまったけどそれは一体何でしょうか？』

【封印の間】であった一部始終を思いだし、その時疑問に思ったことを聞いてみた。

『聖剣ですか？私も伝承でしか知らないのですが……』
実物を見るのは初めてなのですが……』

私の知ってる範囲で宜しければと話を続ける。

姫様の聖剣の話の話を要約すると、

聖剣とは【封印の間】に1000年以上前から封印されていた剣
ということ。

世界が危機に瀕した時、聖剣に選ばれし勇者が現れ世界を救ってくれると。

『3年前、火国ヒコクに魔王が現れました』

白髪の少女は険しい顔で答える。

『魔王？』

少年は聞き慣れない言葉に反応する。

『この世界、フレードムには7つの国があります』

『私達がいるこの国が光国』

『そして、その光国を中心に

火国、氷国、水国、
土国、雷国、風国と6つの国があります。』

『その中でも火国はこの世界では最も大きな力を持った国です
しかし、3年前の魔王襲撃により街は大打撃を与えられたそう
です』
うなだれるように姫様は答える。

『しかし、聖剣をもつ勇者様が現れたとなれば話は別です
ガバツと少女は顔を挙げ、少年の手を掴む。』

『お願いです！魔王を倒しこの世界を救って下さい！』

『え〜と、救えと言われましても』

困惑する少年。

『もちろん世界を救った際には莫大な報酬がです
どうでしょうか？と少女に問いかけられるが、少年はうつろ
うと唸る。』

『いや、ていうかどうやって魔王を倒すんですか？』

『うん。そうですね。』

聖剣の力を最大限に引き出すためには8つの聖霊の力が
必要だと言われてます』

『当面はその聖霊達を探す事が目的となるのではないのでしょうか？』

(聖霊ねえ……)

正直めんどくさい事に巻き込まれたなと思いつつ、少年は隣に視線を移す。

視線の先には瞳と髪が紅い少女がこちらを見ていた。

とりあえず、裸のままでは問題があるのでルメリアに服を用意してもらった。

なぜか、少女は服を着る事に不満をもっていたが、それだと俺が困ると言ったら

しかたなくと言った感じで着てくれた。

『これじゃあ、主様を誘惑できません』
といった言葉が耳に入ったがとりあえず聞き流した。

しかし、これが俺が召喚したものだと言われてもいまひとつピンツと来ない。

とりあえず、ほほに触れてみる。ぷにぷにしている。

少女はくすぐったいですと言いながらも、嬉しそうに視線をこちらに向ける。

ていうか、今気付いたが妙にほほが赤いのは気のせいだろうか、

ていつか妙に瞳が潤んでるようにも見えませんが。

『主様………』

赤髪の少女と見つめ合う黒髪の少年。

『せ、聖霊様？』

その妙な空気にルメリアがおもわず声をかける。

『何よ？』

聖霊と呼ばれた少女は明らかに露骨に嫌そうな顔を声のするほうに向ける。

『え〜っと……聖剣のお話ですが』

何だろっこの温度差はと思いつつルメリアは話を続ける。

『興味ないわ』

『え？』

予想外な言葉に驚く。

『いや、聖剣の真の力を発揮しないと魔王は倒せないと思うわけ
です………』

『魔王にも興味はないわ』

『え〜と、そうなると世界が滅んでしまつかもしれないわけ
です………』

『どうでもいいわ』

すべてを否定する赤髪の少女。白髪の少女には既に興味をなくし
たその少女は
となりの黒髪の少年に視線を移す。

『私が興味があるのは主様だけ』

甘えるような声を出し、己の主と認める者にその視線を絡ませる。もたれかかるように少年にその体を預け、その腕を少年の首に絡ませる。

『ちよつ！せ、聖霊様！』

このままではなんとなく危険だと判断するルメリア。

『そ、そういえば聖霊様のお名前は何と云うのですか？』

ふとした疑問を聖霊に問う。

『名前？』

めんどくさいなあという視線をルメリアに向けつつ、考え込む少女。

『名前は無い……』

どこか寂しそうにつぶやく少女。

『でも、名前が無いとこれから呼びにくいんだけど……』

少年の言葉に少女が反応する。

『では、名を頂けますでしょうか？』

少女は上目使いで少年に名をくれと懇願する。

『名前ですか……火を操る聖霊となりますと

どのような名前が良いのでしょうかね？』

ルメリアの呟きに、赤髪の少女はお前になど頼んでないといった目線を送る。

『じゃあ、火霊とかは？』

『火霊ですか？』

少年の呟きに赤髪の少女が反応する。

『火を操る聖霊だから……火霊、駄目？』

『タクヤ様さすがにそれは安直すぎるのでは……』

とルメリアが苦笑する。

『うれしいです……』

『えっ？』

ルメリアの予想を裏切り、赤髪の少女は好反応のようだ。

『それが私と主様を紡ぐ真名となるのですね？

ではその名を心に刻み、主様と最後まで共に歩もうと思います』
(なんか愛の告白みたいな雰囲気になってるけど大丈夫かこれ?)
少年に何か妙な一抹の不安がよぎる。

『では、真名を頂けたので後は契りを結ぶだけです』

そう言っただけで火霊はおもむろに手を拓也の胸に触れ、

その手をふとももに移動させ、そしてカチャカチャと音を立てながらベルトを外そうとする。

『あのさ？何やってんの？』

とりあえず、身の危険を感じて火霊の手を掴む。

『む？何って契りですよ？』

何か問題でも？と言ったような目で少年を見上げる。

『え〜っと、火霊さんの言う契りとは何でしょう？』

『……？セックス？』

さらっと火霊が問題発言をする。

あまりにもさらっとし過ぎて反応するのに時間が掛かった。

『召喚された人型の聖霊、主の命に絶対服従、これだけおいしい設定で

契りとなれば成人本ではセックスやりたい放題という流れが定番だと思っただけですか？違いましたか？』

何か、妙に気になるキーワードが飛び交う。

『え〜つと、火霊さん？』

『あゝ主様、大丈夫ですよ』

火霊ヒレイは少年の不安な顔から何か気付くものがあつたのが、安心して下さいと会話を続ける。

『エロ本とAVアダルトビデオの知識はちゃんとありますので、その辺は大丈夫です』

さらつとまた問題発言をする。

ばつち来い！ですと親指を立ててグッジョブ！のサインをする。

『火霊さん？知識って何ですか？』

少年はさらに問う。

ピーーーーーーーーーーーーーーーー

少年はこの世界に来る前の記憶を思い出す。

（確か、テレビとかの生放送で放送事故が起きた時とかにモザイクが掛かってこんな音してたよな）

ピーーーーーーーーーーーーーーーー

少年の前にいる火霊ヒレイと名を与えられた少女は自慢げに己の持つ知識を披露する。

だが、少年の耳にはそれが入らない。

『死にたい……』
黒髪の少年がつぶやく。

『主様ぬしさま、大丈夫ですか？』
赤髪の少女が心配そうに少年の顔をのぞきこむ。

今は先ほどの客間から移動し、自分用の部屋だとあてがわれた
部屋のベッドで横になってるところだ。

『うっ……泣きたい』
少年の目が涙で潤む。

『主様ぬしさま……かわいそう』
ぐすつと少女がもらい泣きをしたような仕草をする。

(いや、全部お前のせいだからね！)
声にならない怒りを心の中で叫ぶ。

先ほど、客間から移動したと表現したが
正確には追い出されたと表現した方が正しいだろう。

そう、この目の前にいる赤髪のアホ聖霊がことあるうつか国の姫
様の前で
18禁で伏字を使ってもまだ足りないという表現の話を
ペラペラとしゃべり、姫様にドン引きされた上に絶叫されたのだ。

その悲鳴を聞いて何事かと城内の兵士達がワラワラと部屋になだれ込む。

俺はとにかく誤解を解こうと姫様に近寄るが、

『主様は私という女が有りながら、他の女に手を出すのですか？』

ひどいですう！ケダモノですう！』

と訳の分からないことを言っわめて喚き出し、それをさらに誤解したルメリアに

『ひい！ち、近づかないで下さい！』

と完全に俺をケダモノ扱いする始末、そして、そこに兵どもがなだれこんできたので

誤解が誤解を生む負の連鎖が完成する。

ルメリアを守ろうと攻めてくる光国の屈強の兵士達

あゝ俺死んだなと思った瞬間、俺は聖霊の力を目の当たりにする。

『主様にきやすく触るんじゃねえ！！』

という火霊ヒレイの怒号と同時に客間は炎に包まれた。

炎に包まれた少女の体は人の形でなく竜の形になり、

火竜となったその口からは大小さまざまな火の玉が飛び出る。

逃げ惑う兵士達。

啞然とする俺と火に巻き込まれてはあぶないと俺を盾にするように背後に

ちやつかり移動するルメリア。

(この人は長生きするタイプだな)

そう思いながら少年は白髪の少女を見る。

ルメリアは興味津々に食い入るように火の聖霊と光国の兵士達の

命がけの鬼ごっこを見ていた。

『すごい……』

ルメリアは驚きの表情を見せる。

『何がすごいんですか？』

火竜の息吹がこつちに向かって来ないか内心ハラハラしながらルメリアに問う。

『私達が魔法を使うためには本来、「詠唱」「構築」「魔法発動」という

三つの手順を通る必要があります』

睨むような厳しい目つきでルメリアは少年を見る。

(うっ、まだちょっと怒ってる?)

『一つ目が、この世に存在するエーテルという魔法の素を集めるための「詠唱」』

『そして己の中に存在する加護を通し魔法を「構築」』

『この二つの過程を通してようやく魔法発動となるのですが』
ルメリアは少年に向けていた視線を聖霊に向ける。

『先程の火竜をいきなり召喚するところから見るに、』

『どうやら聖霊には「詠唱」というものが必要ないようですね』

『聖獣召喚の中でも竜の召喚となると「詠唱」にかなりの時間を要します』

『下手をすれば「詠唱」「構築」だけでまる一日潰れる事も有り得ます』

『えっ? そうなの?』

『はい』

体の中に構築式でもあるのでしょうかと、ルメリアはつぶやく。

そう言っていると、目の前で一人の兵士が火竜に吹き飛ばされ窓を突き破って外に落ちていった。

『うーん』

とりあえず、死人がでる前に止めたほうが良いでしょうかね?』

少年がつぶやく。

『ぜひ、お願いします』

がしつとルメリアに腕をつかまれ睨まれながらも懇願される。

（うっ、怒ってるんだろっけど、俺を使って兵士を守らないとって感じで

葛藤してるんだろっな……）

『はあ……』

深いため息を尽きながら、炎の嵐の中へ少年は歩を進めた。

第2話 性霊（後書き）

一応、念のための補足

18禁の成人本とか中学生じゃ購入できないんじゃないの？
って意見があるかもしれませんが、例えば親が隠し持ってたやつ
だったり、友達のお兄ちゃん（18歳以上）から（以下略
ということでも中学時代に見る機会があった
という設定でいきます。

以上

第3話 歩く工口本

カチャカチャとナイフが肉を刻む音が小さく聞こえる。

大きなテーブルにポツンと一人寂しく座る少女。

『はあ………』

ふと、食事をしていた手が止まり、少女はため息をつく。

(最近、慌しい事が多くて疲れましたわ)

本来なら同席してるはずの両親は外交中であるため
今日も一人さみしく食事をする白髪の少女。

せつかくなので一緒に食事でもどうですか？と黒髪の少年も誘っ
てみたのだが

まだ聖霊がうまくコントロールできませんし、この前のような悲惨
な結果になってはと
断られてしまった。

(たしかに、あれをまたやられては困りますわね)

白髪の少女は先日起きた騒動で客間を黒コゲにしまったこと
を思い出す。

(あゝ父^{ちち}様と母^{はは}様になんと報告すれば良いのかしら。)

両親が帰って来た時の良い訳についていろいろ考えてると少々憂
鬱になった。

『はあ………』

聖霊がうまくコントロールできるまではと別の建物にいる
黒髪の少年のことを思い出す。

少年の今いる所は上級魔導士を招いた際に宿泊をしてもらってる建物である。

あそこであれば多少の上級魔法を唱えても、光の加護による特殊な壁が

それをはじくので早々に壊れたり、建物が燃えるはずは無い。

少年と話してみた感じ、悪い人ではなさそうなのだが問題は一緒にいる聖霊である。

『うーん、聖霊ねえ……』

少々自分の想像していたものとかけ離れていたイメージに頭痛がする。

世界を救う勇者として【封印の間】に現れたのはどう見ても普通の少年、

勇者とはとても言えない人物。

そして、それに従う聖霊は……この間の一幕を思い出して赤面する。

『聖霊というのはですからもう少し清らかなイメージがあったのですが』

大変シヨックである。

『はあ……』

何度と分らないため息をつく。

『フウリン、ちょっと良い？』

姫様の食事の世話係りとして並んでるメイドの一人に声をかける。

『はい、何でしょうか？ルメリア様』

声を掛けられたメイドがルメリアに歩み寄る。

フウリンは光国の出身者が多いこの城内で

ただ一人の風国出身のメイドである。

光国の出身者は白髪なのであるが、フウリンは

明るい緑色の髪と瞳が特徴的な女性であるため城内では嫌でも目立つ。

『タクヤ様の様子はどんな感じ?』

『はい、最近は部屋に籠もって熱心に読書をされています』

『そうなの?』

そういえば少年のいる建物の近くを寄った時に、頭の高さを超えるほどの

本を積み上げて移動するフウ＝リンの姿を思い出す。

(ていうかフウ＝リン、バランス感覚がすごいわね)

とその光景をみて思ったのだが

『今は何を読んでいるの?』

『はい、主に聖霊に関する物が多いですね』

後は魔法の方にも興味があるご様子でそちらの方も熱心に読んでいるようです』

『へえ、魔法ねえ』

少年がどんな本を読んでいるか少し興味がわいた。

『先ほど、タクヤ様にお問い合わせされた本を届けに行く用事がありますので』

もし、宜しければ一緒に行きますか?』

『あ、うん。お願いしますわ』

ごめんね、フウ＝リン』

忙しいのにいろいろ押し付けちゃって』

『いえいえ、伝説の聖剣の勇者様を近くで見ると滅多にない機会ですから』

楽しくお世話させて頂いています』

クスクスとメイドは楽しそうに笑っている。

緑の髪と緑の瞳という自分がいた世界ではありえないような組み合わせのメイド姿を思いだす。

(どうみてもコスプレだよなアレは)

『主様はメイドプレイの方が好みですか？』

『なんだよ、メイドプレイって』

げんなりした顔で少年はベッドに腰掛けてこちらの様子を伺う赤髪の少女を見る。

『それはもちろんメイド服を着て、にやんにやんすることですよ』
少女はニコツと笑う。

『にやんにやんってなんだよ。』

そんな比喻表現は最近の若いやつは使わないぞ』

絶対その表現は下ネタだろうと思ひ、少年は苦々しい顔で少女を見る。

(本当、最悪だな)

聖霊が召喚者の記憶の一部をベースにできてるってというのは良
いとして、

なぜこいつは俺の一番隠したい性的な部分のみを抽出して構成
されているんだ？)

少年にとっては歩くエロ本という認識になりつつある、聖霊を見
る。

『火霊ヒレイ、絶対に外ではそんな事を言うなよ？』

目の前にいる聖霊との最近のやりとりを思い出し、無駄だと分か
つていながらも

一応釘を指してみる。

『分かりましたご主人様。』

今日はどうなさいますか？胸でしますか？』

とメイドを意識した言い回しをしながら、両手で自分の胸をもみもみする聖霊。

『胸でするってなんだよ?』

答えは分かっているが、少年は一応聞いてみる。

『パイズリ?』

赤髪の少女は迷う事無く答える。

『遠慮します』

キツパリと少年も断る。

『むう……主様冷たいですう』

どうして私の誘惑が聞かないんだろうと目の前の少女はブツブツと呟く。

(フツ……悪いな火霊、時代は変わったんだよ

中学時代は確かにお前のようなタイプが好みだった、だが今は違う)

そう心の中で呟き、この世界に来る直前に告白した少女の事を思い出す。

(俺の好みは高校時代になって変わったんだ

今の俺は黒髪におしとやかで一見か弱そうに見えながらも、凛々し気なあの目。

そう、まさに大和撫子を人にしたようなあの女性)

そして、告白をした直後にこの世界に飛ばされたことを思い出しガツクリと肩を落とす。

(せっかく、せっかく俺にも春が来たと思ったのに、

あゝ早く元の世界に帰りたい)

『ご主人様、元気を出して下さい

ご奉仕しましょうか?』

コンコン

『タクヤ様？開けて頂いても宜しいでしょうか？』
ドアの向こうにいるであろう少年に向けてルメリアは声を掛けてみる。

『ちよ、ちよっと待ってください！ルメリアさん！』
ドアの向こうで、慌しく人が動きまわる音がする。

『おい！火霊！』

さっきの打ち合わせ通りに早く石になって！』

『え？？なんですか主様？』

まだ、寝るには早いですよお？』

『そんな事は、良いから！早く！』

『むー、主様の意図するものが火霊には理解できません』

『今は理解しなくて良いから！早く石になってくれ！』

『まだ、主様と遊びたいですよ！』

『後で、またいっぱい遊んであげるからお願い！火霊さん！』

『分かりましたよお………』

ドアの向こうでブツブツと火霊が何か文句を言ってる声が聞こえる。

『？？？』

ルメリアとフーリンが頭に？を浮かべながら、お互いの顔を見る。

バシユウウウという音と練成反応を感じ、しばらくの間があった後に

ガチャリとドアが開く。

『す、すみません』

お待たせしました、どうぞ』

少年がようやく顔を出す。

中に入ると火霊ヒレイの姿はなく、部屋の壁に聖剣が

立て掛けられているだけだった。

『あれ？さつき火霊ヒレイ様の声があった気がしたのですが』
ルメリアがキョロキョロと部屋の中を見回す。

『あゝ、火霊ヒレイなら今はここにいます』

少年がこれですと、聖剣の鐔つばを指差す。

聖剣の鐔つばには複数の窪みがあり、その一つに紅い石が
はめ込まれていた。

『ああ、なるほど、聖石ですね？』

ルメリアが聖剣の鐔つばにはめ込まれた石を興味深そうに
のぞきこむ。

『はい、そうです。』

さつき読んだ聖霊の本に聖霊が聖石となって聖剣の勇者と
旅ヒレイをしていたという記述があったので、ちよつと練習がてら
火霊ヒレイに石になつてもらってるんです』
『なるほど、なるほど』

その話は聞いたことがあります

タクヤ様は勉強熱心なんですね？』

ルメリアは机の上に山積みのようになってる本を見て素直に
思ったことを言った。

『いや、ハハハ、せっかくこつちに来て聖霊とか便利な力が
使えるんだし、いろいろ調べといた方が良いかなあつと思いまし

て』

(まさか、中学時代の俺の性癖を暴露されるのが嫌だから死ぬ気で聖霊をコントロールする方法を探してるとは言えんな)

ハハハ……と少年は乾いた笑いをする。

『クスクス……ああ、そういえばフウリンタクヤ様に届け物があるのでしょ?』
ルメリアはそばにいたメイドに声を掛ける。

『あ、はい。』

タクヤ様、こちらが依頼された本です』

少年はメイドから本を手渡される。

『あ、ありがとうございます。』

フウリンさん、助かります』

『なんの本ですか?げげっ!?!』

本のタイトルを見てルメリアが後ずさる。

『?……この本、ルメリアさん知ってるんですか?』

” 上級召喚魔導書 竜の書 ” と書かれたタイトルの本を少年はルメリアに見せる。

『はあ、私、召喚魔法系は苦手です。その本は昔挑戦したことがあるんですけど』

さじを投げちゃった本なんですよね』

ハハハとルメリアが苦笑する。

そうなんですかと言って少年はその本をパラパラとめくる。

『いや、自分も興味本位で魔法を唱えられるかなと思っていろいろ本を』

読んでみたのですがどうも自分には才能が無いみたいで』

と苦笑して、少年はその本に書いてる詠唱呪文が記述されているページを

読み上げる。

一通り内容を読み上げた後、

『ほらね？何も起こらないでしょ……あれ？どうかしましたか？』

少年が顔をあげると目の前にいる少女とメイドが目大きく見開きこちらを見ている。

『えっ、俺なんか発音とか変でした？読み方間違ってます？』

少年が不安げに少女に問いかける。

『いえ、逆です。』

むしろ完璧だと思います。

あまりにも綺麗な発音の詠唱でしたので驚いたのです』
ルメリアは驚いたその顔を隣にいるメイドに向ける。

『ええ、私も驚きました。』

タクヤ様、本当に魔法が唱えられないのですか？』

体の中に加護を通る感覚がないのですか？とメイドに問いかけられる。

『あゝその加護ってやつなんですけど、一応、この世界にある7属性の

基本魔法についての本も読んで試してみたんですけど、

どうやら俺にはどれも当てはまらないみたいでして……』

きまずそうに少年は言う。

『もつたいないですわね。』

それだけ詠唱が完璧ですと、発動する魔法もかなりの威力を発揮するはずです

今度、うちの上級魔導士達に調べさしましょう』

『リディア様、お帰りなさいませ
申し訳ございません、お出迎えができなくて』

赤髪のメイドが客間を見つめる女性に声をかける。

『ああ、ダイナ？気にしなくて良いわよ
急ぎの手紙が来たので私も急いで帰ってきただけだし』

声を掛けられた女性はメイドを一瞥した後、また部屋に視線を戻す。

『しかし、派手にやったわね
真つ黒コゲじゃない』

女性の視線の先にある部屋は大火事でもあったかのように家具が燃え変形し黒ずみになっている。
壁も一面真つ黒になっている。

『はい、聖剣の勇者様に従う聖霊の力は予想以上に大きくルメリ
ア様も
苦勞しているようです』
メイドが苦笑する。

『聖剣の勇者ねえ……』
手紙に書いていた内容を思い出す。

突如、【封印の間】に現れた聖剣とその聖剣に選ばれし者と思われる少年。

その少年は黒髪に黒い瞳というこの世界には存在しない特徴を持っていると

書かれていた。

（黒髪に黒い瞳……）

ギリリと齒軋りをする音が聞こえる。

3年前に我が国を襲った魔王。

そいつはこの世界では最強の生物と呼ばれる竜の大群を操り火国ヒコクを襲撃してきたのだ。

突然の襲撃に街は騒然となり、そして街は大打撃を受けた。

（その場に自分がいれば、まだ被害が抑えれたかもしれないというのが

悔やまれるな）

竜に乗り魔王と名乗ったそれは少女の姿をしていたと聞く。

その髪と瞳は黒。

（まさかな……）

『とりあえずもう少し詳しい状況が聞きたいわね』

ダイナ、すぐにルメリアをここに呼んで』

『分かりました、早急に探してまいります』

メイドがペコリと頭を下げる。

『母が帰って来たかと伝えて』

『はっ！かしこまりました』

メイドは足早にその場を立ち去る。

そのメイドの後ろ姿を一瞥した後、視線を黒コゲになってる客間

に戻す。

（魔王よ、次会った時は私が必ず……）

しかし、その女性の瞳は目の前の客間を見ているのではなく、はるか遠くにいる何者かに向けられていた。

第4話 ヌシフェル

母様は周りから竜姫と呼ばれている。

火国には竜が好む火山が有り、多くの竜が巣を作っている。

竜と共存する事は不可能だ。

故に度々、人と竜が衝突する。

竜の力はとても強く、竜の前では人など虫ケラのように扱われる。竜が吐く炎の息吹は人を一瞬にして炭にする。

そんな地上最強の生物がいる地に、火国という国がある。

火の加護をその身に宿し、上級魔導士となると魔法で

竜の炎の息吹に耐える者もいる。

竜は1000年以上前からこの地にいる。

昔は竜がこの地を支配してた時代もあったらしい、だが1000年前に現れた

聖剣に選ばれし勇者が竜達をまとめていた竜王を倒し、この地を人々が住める世界に変えた。

その勇者から生まれた子供達の血を強く受け継いだのが今の火国の王族達だと言われている。

彼らは竜の炎の息吹をその身に浴びても耐える事ができその強靱な体と拳で竜の硬い鱗を砕くといわれている。

人の身でありながら、竜と対等に戦う事ができる者達を竜人と呼ぶ。

母様は竜王と呼ばれる現国王の弟の娘だ。

幼い頃から類まれなるその才能を發揮し、12歳の時に竜を倒す

己の主おのこに火霊ヒレイと名付けられた火の聖霊は
主おのこのベッドの隅に座っていた。

（主様ぬしさまが後で遊んでくれるというから、石になって
待ってたのに、ようやく外に出れたと思えばこれはどういこと
かね？）

赤髪の少女は不満を持っていた。

白髪の少女と緑髪のメイドがいなくなったので、外に出て己おのこの主を
誘惑して遊ぼうとしたら、今度は白髪の少女とその母と名乗る者が
部屋に突然乗り込んできたのだ。

また、石になるのはめんどくさいと主おのこに言ったら、
部屋の隅でおとなしくしてると命令された。
そして、とりあえず何も喋るなど言われた。

（火霊ヒレイは大変おご立腹である）
火の聖霊はぷくーっと頬をふくらます。

だが、己おのこの主は突然来た白髪の少女とその母親と名乗る女性との
話に夢中になってこっちをまったく見てくれない。

（しかたないな……アレをやるか）

火の聖霊は目を閉じる。

己がこの地に生まれた時に主おのこの記憶の一部と
何者にも負けない強大な火の力を授かった。

『美しい……』

火の聖霊は目の前に広がる美しい光景に目を細める。

これだけの強大な世界をたった一言の詠唱スベル呪文で構築できるのだ、主様の力の偉大さを改めて思い知らされる。

ただ、おしむらくはこの世界に来れるのは自分だけと言うこと。

(本当は主様ぬしさまも連れて来たい所だが……)

どうやらこの世界に来るためには何らかしらの制限があるようだ。しかたないなとため息を付く。

だが、心配する事は無い。

この世界には彼がいるのだから。

火の聖霊は叫ぶ、桃色お花畑の中心で彼の名を。

バサバサ

大きな漆黒の翼を羽ばたかせ、それは舞い降りる。

バサバサ

その姿は人の形をしてる、背から大きな翼を生やしてるのであるいは天使というべきか。

バサバサ

彼は己の名を呼んだ聖霊を見つけ、やさしくほほえむ。

バサバサ

空から舞い降りてきた者と目が合う。

『又シフェル……』

そう、彼と初めてこの世界で会った時、彼は又シフェルと名乗った。

『そんな妄想で大丈夫か？火霊』
彼がいつものようにやさしく問いかける。

『大丈夫だ、問題ない』

ドヤ顔で火霊もいつものように答える。

『又シフェル、聞いてくれ！』

主様が最近とても冷たいのだ

私の誘惑には興味もしめさないし

石になれとか訳の分からないことを言い出すし

私は嫌われているのだろうか？』

火の聖霊の問いかけに彼はやさしく答える。

『火霊、君はツンデレという者を知っているかい？』

『ツンデレ？なんだそれは？』

『この世界の魔法に火、水、雷という属性があるように

僕達の世界にも属性があるんだ
そして僕達が持つ属性の一つがツンデレだ』

『それはどんな魔法なのだ？』

『魔法ではないよ』

そうだね、種族のようなものだと思ってもらえれば良いかな？
数が少なく大変デリケートな種族だ、扱いがとても困るね』

『種族？』

『ツンデレには二つの顔がある、表と裏の顔だ』

『表と裏の顔？』

『そうだ、外にいる彼が表の顔だ』

彼はあまり素直ではない

君に冷たくするのは理由がある

君が好きだからだ』

『なん……だと……』

驚愕の事実を聞き、火^{ヒレ}霊に衝撃が走る。

『外にいる彼はツンの属性を持つ』

その属性を持つ者は好きな人の前では

恥ずかしくてなかなか本心を見せない

冷たい態度を取るのも照れ隠しなんだよ？

好きな人ほどいじめたくなるタイプでもあるのかな』

『あれは照れ隠しなのか？』

うん、すぐには信じられんな』

『フフフ……そうだよね

だから、その代わりとして僕がいる

彼の君に対する申し訳ないという贖罪じゅくざいの感情から

君だけのこの世界にこっそりと干渉してるのが

もう一つの裏の顔である僕』

『裏の顔……』

『そう、僕がデレの属性を司る

君を傷つけた心を癒すために君の前に現れた墮天使

又シフェル』

『又シフェル……』

『彼と僕は二つで一つ

ツンデレという特殊な種族なので

君には申し訳ないと思っている

許して欲しい』

愛する主様ぬしさまと同じ姿をしつつ、

生まれたままの姿の墮天使が微笑む。

外の世界の主様ぬしさまが火霊ヒレレイに普段見せる事が無い

状況だけにその破壊力は大きい。

『ゲフッ』

思わず吐血しそうになった。

聖霊には肉体というものが無いので

出血をするということはないのだが。

『な、なるほど……そう考えると今までの
主様の態度にも合点が行く
（めしさま）
そういうことか！』

納得したとばかりに顔をガバツと挙げ、そして又シフェルの
股の下をギリリと凝視する。

（意外と大きいな、外の主様もやはり……ゴクリ）
（めしさま）

彼の股の下から雄々しくそびえ立つ巨頭に

火の聖霊は釘付けである。

ぶっちやけ、今までの話はどうしても良かったりする。

『分かった、又シフェル

あなたを許そう！

だから、早く降りてきて私を抱きしめて欲しい』

ハアハアと鼻息が若干荒くなってきた気がするが

火の聖霊は気にしない。

『火霊ヒレイ、落ち着いて聞いて欲しい

先ほど言った様に僕たちはとても恥ずかしがりやな

人種なんだ、心の準備をさせて欲しい』

『心の準備か……心の準備なら仕方ない、待とう！』

待つとか言いつつ、タイミングさえ合えば飛び掛ってやろうと
考える火の聖霊。

（ハアハア、かわいいよ又シフェル、ハアハア

かわいいよ又シフェル、又シフェル、マジ墮天使！）

桃色の花畑をまだかなあ？まだかなあ？と呟きながら
火の聖霊がカサカサと蠢く。

その様子を外の主あつが見たら、

『変態！近づくな！』

と枕でも投げつけてきそうな感じだが、

目の前にいる彼はやさしく微笑む。

『そんな妄想で大丈夫か？火霊ヒレイ』

彼がやさしく問いかける。

『ハアハア……ハア？だ、だいじょぶひゃあ！』

興奮し過ぎて呂律が回らない。

（又シにゃん、ハアハア……又シにゃん、ハアハア）

なかなか降りてこない彼に火の聖霊はだんだん
痺れを切らしそうになってくる。

（ウヒャアア！駄目だ！もう、我慢できん！）

意を決したように、彼の股間に狙いをすます。

『愛してるよ、火霊ヒレイ』

彼がやさしく囁く。

『イ、エアアアア……！』

火の聖霊の喜びの雄叫びが、妄想世界にこだまする。

喜びのあまり頭の中が真っ白になった変態せいいはそのまま
桃色の花畑に崩れ落ちた。

第4話 ヌシフェル (後書き)

> i 3 3 8 7 3 | 3 9 9 3 <

第5話 アフォオ

俺は少しだけ後悔している。

確かに隅っここでおとなしくしてるとは言った、

余計な事は喋るなとも言ったかもしれん。

少年は汚物を見るような目でそれを見る。

『ウへへ……又シフェル……ウへへ』

あの顔は完全にトリップしてる状態だと思われる。

阿呆のように口からよだれを垂らし、その瞳はどこを見てるかはよく分からない感じで宙を彷徨っている。

(クスリでもやってるのかこいつ……)

『うわぁ……』

声のする方に少年が視線を移動すると白髪の少女が汚物を見るような目でソレを見ている。

おそらく少年と同じモノを見てしまったのだろう。

しばらくした後、見てはいけないものを見てしまったという感じで少年の方に視線を移動させ、少年と目が合う。

(ルメリアさん、何も見てませんよね?)

少年はやさしく少女に微笑む。

(ええ、タクヤ様

私は何も見ておりませんわ)

少女もやさしく微笑み返す。

なぜか目と目で通じ合う二人。

次元を超えても以心伝心というものは存在するようだ。

『ルメリアさん、もし宜しければ

聖霊を石化する魔法の本を

紹介してもらうことは可能でしょうか？』

『聖霊を石化する魔法は聞いたことは

ありませんが、聖獣を石化する魔法は

聞いたことがあります

後でフウ＝リンに探させときますね』

少女はニコリと微笑む。

『ありがとうございます』

どうやら彼女はコッチ側のようだ。

少年はすごく安心した。

この一連の短いやりとりだけで、少年の意図を

汲む返事してもらえただけに、少年の中で

目の前の少女の好感度は急激に上がった。

この世界で異端なのは自分の聖霊だけなようだ。

その事実少年はちよつとイラッとした。

そして、アレが自分の記憶の一部で作られているという
事実改めてショックを受けた。

『タクヤ君？』

『この聖剣触っても良い？』

『えっ？ああ、良いッスよ』

『どうぞ、どうぞ』

声を掛けられた方向に少年が視線を移動させると女性が周りから聖剣と呼ばれる剣を片手でひょいっと持ち上げていた。

彼女はリディアと名乗った。

どうやら、ルメリアの母親のようだ。

姫様のお母さんと言うことで、ちょっとビビッてしまったが思ったより軽い感じの人なようで

『堅苦しいのは嫌いだから楽にしてくれて良いわよ』
『という感じで割とフランクに話しかけてくれる。』

こちらとしても元いた世界で王様とか王妃様だとかいうのに会った事ないので、そういった場でどう対応すれば良いのかを悩んでただけにその言葉はありがたかった。

そういえば、ルメリアと初めて会った時も

お姫様という感じの印象がなかったので

その辺をあまり気にせず、同世代と喋る感じで喋ってたなあと今更ながら思い返す。

ルメリアの人懐こい感じはお母さん譲りかなとも思った。

『へえ〜これが聖剣ねえ』

聖剣を見る彼女の瞳はルメリアと違い赤く、

その瞳はやさしくも鋭い目をしているという印象を受けた。

髪は長く、顔の左半分を前髪で隠している。

『ルメリアも持ってみる？』
リディアが娘に問いかける。

『あつ、はい、母様^{かあさま}』

聖剣には前々から興味があったので、
迷わず少女が手を差し出す。

『片手ではムリよ』

『両手を出しなさい』

『？』

少女は少し不思議な顔をして、母親に言われるがままに
両手を差し出す。

そして、その剣が少女の両腕に渡される。

『！？……ぐっ、重っ！』

少女はその重さに驚く。

まるで成人男性をお姫様抱っこしてるかのような気分になりながら、
聖剣を持つというよりは抱き上げる。

油断して膝が付きそうになる前に、母親が聖剣を持ち上げてくれた。

『ふう……驚きました』

『見た目と違ってずいぶん重いですね』

少女は額から汗をぬぐうような仕草をした後、少年を見る。
こう言っではなんだがパツと見た感じ、少年はそこまで

力があるように見えなかった。だから、少年が聖剣をひよいひよいと持っている様子から随分と軽い印象を持ってただけにすごく驚いた。

『タクヤ様って意外と力あるんですね？』

『えっ？ そうなの？』

『そんなに重いソレ？』

少年としてはその辺に落ちてる棒切れを振り回してる感じで聖剣を持ってただけに目の前の少女のリアクションに少々驚く。(うーん？ こっちの世界に来て筋力がアップしたのかな？)

『ありがとう』

『そういえばタクヤ君はこことは違う世界から来たという話だったわね』

リディアは聖剣をもとの位置に戻し

少年に視線を移す。

『あつ、はい』

信じてはもらえないかもしれませんが
どうにも自分がいた世界とは違うようで

最初は外国かなとも思ったのですが、魔法とかは
自分の世界には無いものでその……』

若干、しどろもどろになりながら答える。

『へえ、そうなの？』

でも、黒目に黒髪ってというのはめずらしいわね
こっちの世界では見たこと無いわ』

そう言ってリディアが、少年の瞳を覗き込むように顔を近づける。

(?!?……近づ)

突然、女性に目の前まで近づかれたため少年は驚いて後ろにのけぞりそうになる。

『フッフ……そんなに驚かなくても良いじゃない

それと、さっきルメリアから魔法が使えないって聞いたけど
そうなの?』

『あつ、はい、まだ確証は持てませんが

たぶん、使えないと思います』

『ふん』

そう言って、彼女は更に少年に近づく。

鼻と鼻が触れそうだなと思う所にまで近づいてきて

少年はドキドキしてしまう。

そして、ふと彼女の前髪に隠れた部分が視界に入ってくる。

(あつ……そういうことか)

少年の意識は別の所に向けられていたため気付くことはなかった。

目の前の女性の瞳に一瞬、怪しげな色が灯った事を。

『?!?……火霊?』ヒレレイ

突然、リディアと拓也たくやの間に一つの影が滑り込んでくる。

『なんのつもりだ?』

火の聖霊が目の前の女性を睨み上げる。

『あら、ごめんなさい』

何か気に触る事でもしてしまったかしら』

いきなり割り込んで来た火の聖霊に少々驚きつつも何事も無かったかのようにリディアは少女を見下ろす。

『……………』

『……………』

王妃と火の聖霊の突然の睨み合いが始まり

その場が一瞬の静寂につつまれる。

『女狐^{めじろ}』

少女がボソリと呟く。

その呟きにリディアの体が微かにピクリと反応する。

『おい、火霊^{ヒレイ}? どうした?』

妙な空気に少年は耐え切れず、目の前の聖霊に声を掛ける。

『……………』

だが、少女は主^{あぬ}の問いかけに答える事無く目の前の女性を睨み続ける。

『フッフ……………ごめんなさいね』

何か気に触るようなことをしたのであれば

あやまるわ、ルメリア?』

女性は近くにいる、少女に声を掛ける。

『あつ、はい、母様^{かあさま}』

『ちよっと急用を思い出したから』

またしばらく出掛けるわ』

『はっ！何でしょうか？リディア様』

赤髪のメイドがどこからともなく、王妃の横に現れる。

『すぐに聖剣と聖霊とやらについて調べろ！』

あんなもの呆けた老人の戯言かたわごと

思ったがアレを見て気が変わった』

『アレですか？』

聖剣のことでしょうか？』

『違う、聖霊だ！』

聖剣の勇者という少年も見た目はただの子供ガキだが
どうにも気になる

他の者達を使つてすぐに調べさせる』

『はい、承知しました』

『それと、あの少年についての情報規制も解け

聖剣と言つても本当の話なら1000年前の話だ

少しでも情報が欲しい、もしかしたら聖剣の情報に
くいついた他国の連中から情報が入る可能性もある』

『しかし、宜しいのですか？』

黒髪に黒目の人間が現れたとなると火国の者達が黙ってません。

3年前の魔王の件もありますし』

赤髪のメイドが眉をひそめ、王妃に問いかける。

『ならば竜王に言つてやれ！』

全責任はリディアが持つとな』

リディアがメイドを睨みつける。

『はっ！承知しました』

（まったく聖霊というのは忌々しい生き物だな
部屋の隅で阿呆のように呆けてたと思つたら

あの反応……）

王妃は少年を魔王の手先ではないかと疑いをかけ
彼を敵意のあるまなざしで覗き込んだ瞬間に
火の聖霊が間に突然入ってきた事を思い出す。

（そして、あの目）

王妃は前髪をかきあげ、その下にある傷に触れる。
その傷は額から顎にかけて抉^{えぐ}るような傷跡を残している。

（そうだ、竜だ

あれは竜の目だ）

幼き日に竜に傷つけられた古傷がうずく。

そして、数多くの竜との死闘を繰り広げた中で
つちかった経験が己の本能に警鐘を鳴らす。

（あれは危険だ

すぐに対処せねば

万が一という事もある

まさか、我が城に竜を招くことになるとは
思わなかったがな）

『フフフ……』

王妃は自嘲気味の笑みを浮かべる。

『リディア様？』

『ダイナ、これから忙しくなるぞ
すぐに事を始めろ！』

『はっ！では、失礼します』
そう言つてメイドは音も無く、王妃の前から消え去る。

『竜か、本当に厄介な事にならなければ良いのだがな』

王妃の中に一抹の不安を残しつつ、王妃の手の者達による
暗躍が静かに始まる。

第6話 古竜

『スウー……ハアー』

大きく息を吸いこみ、そしてゆっくり吐き出す。
幾度かの深呼吸を終え、ようやく一息つく。

『フッフ、さすがに竜姫とまで言われた

お前でもあれにはまいったようだな』

『生きた心地がしませんでした

あれは何ですか？』

『古竜だよ』

『古竜？』

『1000年以上前から生き続けてる

竜といわれてるらしい、聖剣の話くらいは

お前も知ってるだろ？』

『ええ、まあ……』

自分の目で確かめたもの以外は信じない性格なので

正直な話、昔からおとぎ話のように言われる

聖剣の話はあまり信じてない。

『その顔はあまり信じてないという顔だな……』

『1000年も前の話ですよね

正直信じると言われても難しいですね』

『まあ、お前の性格だとその反応が正しいんだろな』

『アラン隊長は信じてるんですか、聖剣の話？』

『古竜がいるからな

もしかしたらという気持ちはあるな』

隊長と呼ばれた男は目の前の女性に苦笑交じりで答える。

『お前、今いくつになった？』

『20歳です』

『たしか、竜を初めて倒した時は……』

『12歳の時です』

『12歳か……普通、あれって20歳くらいからやるだろ？』

俺でも挑戦した時は18歳の時だったぞ？』

『フフフ……その代償がこれですよ？』

女性は顔の左に出来た大きな傷を指差す。

『それでも、生きてただけ充分だと思いがな』

『たしかに今思えば少し無謀過ぎたかも知れませぬ』

左目を失う程の重傷を負った帰りに

こっぴどく目の前の男に叱られた事を思い出す。

彼とは幼い時に父を亡くしてから長い付き合いになつてる。

父の親友でもあった事も有り、小さい時から稽古の相手をしてもらって随分鍛えられた。

『お前がそんなことするから、第一皇子がひどい目にあつてたな』

『別に競う必要は無いと思つんですがね』

『そうはいかんだらうな』

竜王の息子としての面子めんつもあるしな

あれってお前の二つ上だろ？』

『そうですね』

『お前が最年少記録なんて作るから』

その一年後には急遽竜殺しに行く破目になつたんだよな

「かわいいそうに……」

かわいいそうにと言いつつも笑ってる男の表情を見て顔に傷を負った女性が苦笑する。

「仮にも第一皇子の話ですよ

竜王の親衛隊長が笑い話にしてはいけないと思うのですが」

「あゝ俺、竜王嫌いだしな」

「フッフ……」

「まあ、もうすぐ俺も親衛隊長の任を解かれそうだしな

次は第一皇子がなるんだとさ」

男はやれやれと言った表情をする。

「それよりも、古竜を見た感想は？」

「そうですね」

男との笑い話で先ほどまでの緊張がほどけて来たのを

見計らった話の方向転換だろう。

先程あった事を顔に傷を負った女性は探るような表情で思い出そうとする。

「正直、溶岩マグマの中を泳ぐ竜がいるとは思いませんでした」

「たしかにその辺を飛んでる竜程度の鱗だと

人が溶ける程の熱さもつ溶岩マグマの中を泳ぐことはできないんだろ
うな

古竜以外にあれをやる竜は……俺は知らないな」

「それにも驚きましたが、空飛ぶ竜達を撃ち落とす隊長の火の魔法がまったく効かない竜がいる事にも驚きました」

「お前はあれに勝てると思うか？」

「正直、今の私には難しいでしょうね

隊長があれに勝てないと言われれば火国ヒコクに勝てる者は
いないのでは無いでしょうか？」

『フツ……あれには俺も驚いたよ
しかも何事もなかったのように溶岩マグマの中をまた泳ぎだすからな
』我々の存在に気付いてないかのようなふるまいでしたね
いや、気付いてるけど気にかけてないと言った感じでしょうか
？』

女性はその時の目の前で起こった信じられない光景を
思い出すかのように目を細める。

『やつらは気付いてるさ、ただこちらに必要以上に干渉しないだ
けさ』

『なぜですか？』

『聖剣の勇者様の恩恵ってやつかな』

1000年前に竜をまとめてた竜王を倒した話は知ってるだろ』

『ええ、まあ……』

『その時に約束をしたんだとさ古竜達を滅ぼさないかわりに』

この世界の人々に干渉するなってね』

『信じられませんね』

その話が本当だとすると過去に現れた聖剣の勇者という人物は
竜と話す事ができたという事になる。

確かに竜は他の生物にくらべて賢いと思う所があるが、
会話は到底できる相手とは思えない。

『でも、俺の攻撃を受けても何も反応しなかっただろ？』

『たしかにそれはそうですが……』

『だが、奴等にも不干渉という約束を破ってまで守ろうとするモノ
がある』

男が発したその一言に女性は身震いをする。
彼女が先程、古竜と対峙した時に最も恐怖を感じた瞬間。

『卵ですわね？』

『そうだ』

男が目を瞑り、苦々しい表情を浮かべる。

隊長と呼ばれる男が古竜の後ろにある卵に火の魔法を放とうとした瞬間、

それまで我々に興味も示さなかった古竜がこちらに強烈な殺気を放ったのだ。

歴戦のつわものである彼でもやはりあれ程の殺気に当てられるとしんどいものがあるのだろう。

『古竜の卵には触れてはならん』

『はい』

『お前が自分で見たものしか信じない性格ゆえにあれを見せた』

『はい』

『この世にはお前の想像をはるかに超えた者達がいる』

お前は強い、いずれ俺も超えるだろう』

『はい』

『そこはもつと謙遜してくれよ』

『父が父ですしね』

『まあな……』

竜王の弟である父は、その類まれなる力を持つが故に早くから目をつけられ、

その力に嫉妬する者達に謀殺された。

くだらない身内達の権力争いだと思うが、王様になるかならない

かという

話になるといつの時代もそのような事はたびたび起こるものである。

自分もその厄介な立場上、幾度か命を狙われる事があった。

だが、早くから父親の親友である彼にそのような権力争いで、生き残るための知恵と力の使い方を教わり今日まで生きてきた。

『お前の父親が亡くなった時に俺にはお前と同じ年の子供がいた』
『分かってます』

『まあ、聞け』

人質と言われれば都合の良い言い訳に聞こえるだろう

だが、俺にとって一番に守るべき者は子供だった』

『……』

『故にお前の親父を助ける事ができず、俺は親友を見殺しにした』
『仕方のないことです』

『子供がないお前にはまだ分からない話だな
だが、いずれお前にも分かる時がくる』

『そんな時が来るのでしょうかね？』

愛と言う感情は今の自分には良く分からない感情である。

生涯独り身だと思ってる自分に、愛する者ができる時が来るとは到底想像できない、

故に少々ぶつきらばうな返事になってしまった。

『いいか、リディア』

守るべきものが出来た時には良く考えて行動をしる

一番大切なものを失わない選択をするんだ』

隊長と呼ばれた男の言葉にリディアはうなづく。

そして、古竜と対峙した時の事をもう一度思い出し身震いする。

卵に手を掛けようとした我々に対して、古竜は溶岩マグマの中から
ゆっくりとその大きな頭を出し、その牙を剥き出しにして
こちらに笑いかけてきたのだ。

その時のリディアには、古竜の表情はそう見えたとしか言えな
かった。

私の大切なモノに手を出してみれば分かっているだろうかと、言
葉を発せずとも

古竜から放たれる殺気にはそれに近いものを感じた。

）
）
） ）

コンコン

『入れ』

カチャ

『失礼します』

『ああ、ダイナか』

ちょうど良いところに来た

こっちの用事もついさつき終わったので

一息つこうと思っていたところだ」

王妃は入ってきたメイドを一瞥し、腕を伸ばした後に肩を揉みほぐし始める。

『例の少年の件か？』

『はい』

赤髪のメイドがうなづく。

『さて、それでは報告を聞こうか？』

椅子に深く腰掛け、王妃がメイドに催促をする。

『はい、先日よりリディア様に言われ

少年を監視しておりましたが

特に目立った所は無く

やはり普通の少年のように見えるとのこと』

『上級魔導士達にも調べさせたのか？』

『はい、魔法が使えないとの話もありましたので

上級魔導士達の協力のもと調査をしましたが

いずれの加護にも当てはまらないとの

報告を聞いております』

王妃がメイドを睨みあげる。

『本当かそれ？』

この世界で加護が無い者など聞いたことがないぞ？

必ず何らかしらの加護の反応があるはずだ』

『正確には微弱ながら加護の反応を感じるのですが、

何の加護かを特定するまでの調査ができませんでした』

『調査できなかつただと？』

どういうことだ？』

王妃の問いかけに、メイドの表情が暗くなる。

『それ以上調べようとするとする前に』

上級魔導士達が皆、逃げ出してしまふのです』

『なぜだ』

『それ以上探りを入れようとしたら、その……』

火の聖霊に警戒されてしまいました』

『ああ、そういう事か』

先日、聖剣の勇者と言われる少年に会った時に
火の聖霊に睨まれた事を思い出す。

（あの気に当てられたら怖じけづくのも無理はないか
竜を相手にするつもりで挑まなければ、
あれには少々面食らうものがあるしな）

『という事はやはり警戒すべきは』

聖霊ということになるな』

『その聖霊の件ですが……その……』

『なんだ？』

『いえ、実はその、メイドの一人が、その……』

歯切れの悪いその口調に王妃は眉をひそめる。

『！？』

突然、部屋全体を何者かの殺気が包み込む。

『……何だ、これは？』

『ぐっ！？リ、リディア様』

メイドがその顔を苦悶の表情にゆがめ、地に片膝をつく。

最近、少年が魔法が使えないという事を調べに、いろんな人達が部屋に尋ねて来る。

姫様のお願いとという事で、こっちの世界に来てから何かと世話になつてる身ゆえに

むやみに断ることもできず、部屋に来た人達を招いている。

ただ、火の聖霊である火霊ヒレイは、あまり彼らの事を良く思っていないみたいで

少年の事を調べてる人達を逆にジロジロと調べだし、尋ねて来た人達が最終的に

顔色を悪くして帰ってしまうという妙な現象が起こってる。

正直なところ、他人にジロジロと体を調べられるのも良い気がしないので、

尋ねて来る人達には申し訳ないが、なんか早く終わるしと思って放置していたのだが、今日はいつもと状況が違った。

いつものように、上級魔導士だとかと言う人とそれに付いて来た赤髪のメイドが部屋に入ってくる。

部屋に入って来てから妙に気になってたが、メイドの目つきが今までの人達に比べてかなり鋭く、終始まとわりつくような視線を少年に絡ませてきた。

上級魔導士よりもある意味ねつとりとした視線に、あまり気分は良い感じが

しなかったが姫様の頼みだし、我慢するかと少年は何事もないような態度をとる。

『ちよつと背中を見せてもらいたいので、うつ伏せになつてもらつても

良いですか？』

『あ、はい………』

なんか体も悪くないのに、毎日病院で診察を受けてる気分だなと思いつつながら

少年はベッドに横になる。

赤髪のメイドから、チクチクするような痛い視線を感じながらうつ伏せになると、突然背中にゾクリとするようなものを感じる。

バタン！

何かが倒れるような大きな音がして、ドアの方に目を向けると先程まで自分を睨んでたメイドが倒れており、
火霊ヒレイがその隣でそれを見下ろすように立っていた。

「え？」

何が起こったのか訳の分からない状況に少年は混乱し、
上級魔導士が慌てて倒れたメイドにかけより、
腕を肩に回して起き上がらせようとする。

「だ、大丈夫ですか？」

手伝いましょうか？」

「いや、大丈夫です」

申し訳ございません

き、今日はこれで失礼します！」

なぜか、上級魔導士の人に何度もあやまられ、
メイドと一緒に部屋を出て行った。

(ていうかメイドの人、痙攣してたような気がするけど、
本当に大丈夫かあれ?)

部屋のドアから顔を出し、廊下をヨロヨロと歩いてく後ろ姿を見送った後、隣にいる火の聖霊に視線を移す。

『火^{ヒレイ}霊？何やった？』

『主^{めしさま}様をすごく睨んでたので、睨み返しただけですよ？』
悪びれた様子もなくニコリと赤髪の少女は少年に微笑む。

はあとため息をつき少年はドアを閉め、椅子に座って最近の日課である読書を始める。

その様子を火の聖霊がニコニコと微笑んでしばらく見た後、少年に背を向ける形でベッドに腰を下ろし、視線をドアに向ける。

(前々からお前達の態度には気に入らないものがあつた、
主^{めしさま}様の命令が無いから今日までおとなしく
していたが……)

クスリと少年に聞こえぬように小さく笑った後、目を鋭く細めて目的の者を探す。

(さすがに今日のは限度を超えているな、
そちらがそのつもりなら相手になるぞ?)

目的の者を見つけた瞬間、少女の目は大きく見開き口は頬まで裂け、するどい牙をむき出しにする。

その笑みは少年が見れば驚く程、醜悪なまでに歪んでいるが少女は気にしない。

(ククク……貴様が何を企んでるか知らんが

おそらく、今日少年に接触した者は触れてはいけないものに、触れてしまったのだろう。

殺気に近いものでも放たねば、ここまでの怒りに触れることはないはずだ。

(警告というやつかな?)

王妃はメイドとは対象的に、涼しげな顔で椅子に深く座りなおす。

『ダイナ、今すぐ少年に接触しようとしてるメイド達をさがらせる、これ以上の干渉はこちらに被害を出すだけだ』

『しかし、リディア様

あの者達についてはまだ不可解な点が多々あり

もう少し詳しく調べる必要が……』

震えながらもメイドは、王妃の意見に反論を唱える。

『ならば、貴様がこれの相手をするのか?』

『……』

王妃の問いかけに、メイドはすぐに答えられる事ができず沈黙をしてしまう。

『今、少年の身の回りを世話してるメイドは誰だ?』

『フウ＝リンです』

『フウ＝リン? ああ、風国のメイドか……』

自分の嫌いな風国の者の名前がでてきたことに、

王妃は眉間に皺を寄せる。

『ふん、だがある意味では都合が良いかもしれんな

良いだろう、ならばフウ＝リン以外のメイドに少年への直接干

渉を

さけるように命令しろ、すぐにだ』

『しかし、フウ＝リンは風国の……』

『ダイナ、そもそも今回の失態はメイド長であるお前の責任でもあるのだぞ』

分かってるのか？』

『も、申し訳ございません』

王妃からの怒りも混じった言葉に、メイドはうなだれる。

『分かったら、さっさと行ってメイド達に指示をして来い！』

話は終わりとばかりにメイドを睨む。

『わ、分かりました……』

メイドはようやくといった感じで立ち上がり、ヨロヨロと部屋を出て行く。

(ふう……やはり、狙いは私か)

先ほどから、部屋を包んでる強烈な殺気による頭痛が王妃を悩ませる。

竜姫とも呼ばれ、周りから恐れられる自分を

初対面で狐扱いたした火の聖霊の事を思い出す。

握り締めていた手を広げると、じつとりと汗をかいていた。

(今の私一人であれば多少は相手ができるかもしれんが、

あの時とは状況は違う)

かつて隊長と呼んでいた男と共に、古竜と呼ばれる竜と対峙した記憶を思い出し苦笑する。

(一番大切なものか……)

今でこそ、あの時の隊長の言葉の意味を理解する事ができる。

子供がいなかった当時は気にもしなかったが、娘ができた今なら思う

何を捨てても守りたいと思う我が子。

一人身であった当時とは違い、今は背負ってる者がいる。

この城であれと戦いを始めれば、周りの被害は甚大なものになるであろう。

火の聖霊には、初めて対峙した時から、過去の嫌な記憶を思い出させるものを

薄々と感じていた。そして、それがついに現実となる。

娘を守りながら、あれと対等に戦う事ができるかと思えば自信が無い。

（お互い大切なものをそばに置いてる身だ

できれば平和的に終わらせれば良いのだが）

今日までに、メイド達が調べた少年に関する資料の束から、

一枚の紙をとりだす。

（火の聖霊、火のエーテルでその身を作り主あるじを守る存在か……

フッフ、意思をもった火の魔法相手に、どうやって戦えば良いのかしらね？）

自嘲交じりの笑みを浮かべ、城の中で強大な殺気を放つそれを

探るように視線を移す。

（だが、いずれは相手をしないといけない時が、くるかもしれんな）

どんなに強い者であっても、大切な娘に危害を加える者であれば容赦を

するつもりはない。

その時が来ない事を願いながら、王妃は深いため息をつく。

『なるほど、ガッコウという所は集団で勉学をする施設なのですね？』

『まあ、そうですね』

大抵の子供は学校に通って勉強をしますね』

自分の所でも1000人くらい超える生徒がいましたね』

スープを食べていた手を止めて、白髪の姫様の質問に答える。

『1000人は多いですわね』

こちらでは魔法等を学びたい時には高名な魔導師のもとへ伺って学びますが』

タクヤ様の所のように大人数で学ぶような施設はありませんね』

『まあ、人が多過ぎて名前が覚えきれませんがね』

『たしかにそうですね』

でも、うらやましいですわ』

少女はため息をつき、手に持っていたスプーンを皿の上に置く。

『えっ？何ですか？』

『実は私、そういった集団での勉学をした事が無いんです』

私の場合、皇女という立場的なものがありますので何かを学ぶときは』

魔導師を城に招いて勉学をします』

『へえ、そうなんですか？』

『はい、だから年が近い人と一緒に何かを学ぶというのに少し憧れてたりします』

(自分は学生時代にあまり良い思い出が無いから何とも言えんな

……)
目の前の少女の反応とは対照的に冷めた感じで黒髪の少年は過去の記憶を思い出してため息をつく。

(まあ、誰かと一緒に勉強した経験が無い人からすれば
憧れたりするものなんかね)

皿に入ってるスープを掬い、口に運ぶ。

(しかし、こういう食事の仕方は落ち着かん……)

少年は周りの状況を確認するように視線を動かす。

最近なんとなく火の聖霊の扱い方に慣れてきたので今日はめずらしく

ルメリアの夕食のお誘いに招かれてみた。

両親は二人とも外出中なようにで光国のお姫様コウコクと二人で少年の世界の事を話ながら食事中なのである。

(女性と二人で食事という状況にも困るけど、こう周りに人がいっぱいいる

状況で飯を食うってというのがもつと落ち着かん)

若干疲れた表情で部屋の隅に並んでるメイド達を見る。

目の前の少女は普段からこのような環境に慣れてるためか気にせず食事をしながら少年に話の続きを催促してくる。

普段と違う状況にいろいろと困惑してしまつて正直ご飯の味も良く分からない状況である。

『主様めしさま、大丈夫ですか?』

隣に座ってる火の聖霊が少年に小さな声で話し掛ける。

普段より食の進みが悪いから少年の心境が何となく分かるのだろう心配そうな表情で少年を見上げている。

『ん？ああ、大丈夫だよ』

本当はあんまり調子が良くないが火の聖霊を心配させないように声を掛け、そばにある水が入ったコップに手を掛ける。

『おい、淫乱ホワイト』

今日は主様の調子がすごく悪いのだ、空気を読め！』

『えっ？』

『ブフオオ！？』

おそらく誰もが想定していなかった言葉であろう何を言われたか理解できなかった姫様は目を丸くして食事をしていた手を止め、黒髪の少年は飲みかけていた水を噴き出す。

『え〜と、今なんとおっしゃいましたか？』

きつと、聞き間違いだろうと思ってルメリアは火霊ヒレイに聞き返す。

『だから、少しお前は自重しろと言ってるのだ』

淫乱ホワイト』

『い、い、淫乱ホワイト！？』

ホワイトという言葉の意味は良く分からなかったが、今まで生きてきた中で

淫乱という言葉が言われたことがなかったので、驚いてルメリアは立ち上がり

その拍子に座っていた椅子を倒してしまう。

『なんだ自覚無しか、女狐めきつねの子はやはり狐だな』

そうやって周りを騙して生きてるのか？』

『どういう意味ですか？』

クククと火の聖霊は笑う。

『心が醜いから、お前の母親は顔も醜いんじゃないのか？』
瞬間、姫様の前にあったスープの入ってた皿が消える。

ドスッ！

『むっ？ほう、思ったより早いじゃないか』
目にも止まらぬ勢いで火の聖霊の腹に突き刺さった皿がお腹に吸い込まれている
というよりは溶けていくのを確認した後、ゆっくりと火^{ヒレイ}霊はうれしそうに顔を上げる。

『ようやく化けの皮が剥がれたか、それがお前の本性か？』

『これでも手を抜いた方よ？』

顔を狙わなかっただけありがたいと思っ^て欲しいわ』

皿を投げ終わった手をゆっくりと下ろし、火の聖霊を睨みつける。
その瞳はいつものような穏やかさを失くし、母親を思い出させるような
燃えるような紅色の瞳を爛々と輝かせていた。

母親から女性の顔は故意に傷つけてはいけないと強く言われてるため
腹を狙って皿を投げたのだ、幼少期であれば間違いなく今の母を侮辱する
言葉で顔面を殴り骨を砕いてたところだ。

クスクスと火の聖霊は笑い、次にどうやって目の前の少女を挑発しようかと
思考をめぐらせる。

その思惑を読み取ったのか、ルメリアは拳を静かに強く握り締め

る。

『あやまれ火霊ヒレイ！』

一触即発の空気が突然、別の者の怒号によって遮られる。

『ぬ、主様ぬしさま？』

火の聖霊は驚いた表情で隣に座る主あかに視線を移す。

『お前がルメリアさんのお母さんの事をあまりよく思っていない』
とは

分かってるし、その事で最近イラついているのも知ってる

だが今の言葉は見逃せん、あやまれ火霊ヒレイ！』

『…………』

そこまで己おのの主あかに怒られると思ってなかったのだろう

明らかに狼狽した表情で、その視線は定まらず宙をさ迷う。

『な、なぜ私がコイツにあやまらないと…………』

『すみません』

火の聖霊が言い終わる前に、少年が姫様に頭を下げる。

『…………』

ルメリアは頭を下げる少年を静かに見つめる。

『うう…………す、すみません』

若干しぶしぶと言った表情で火の聖霊も頭を下げる。

おそらく少年と違って自分が頭を下げる理由を理解してない
ためであるう困惑の表情が読み取れる。

『顔を上げて下さい』

『教えてルメリア、怒らないから
どうして顔を殴ったりしたの?』

母親は娘がおびえないようにできるだけ優しく尋ねる。

『だって、だって……あの子が母様の事を娼婦だって』

『えっ?』

『あんなお化けみたいな顔の女が王様と結婚できる訳がないって
きつと、娼婦みたいに体を使って父様を』

誘惑したって……だから』

だから殴りましたと少女は母親に聞こえるか聞こえないかの小さな声で答える。

それは光国の城に庭の手入れに来てた庭師が連れてきた男の子とルメリアがたまたま知り合った事から始まる。

同世代の友達がいらないルメリアにとっては、年の近い子供がいる事に喜び

近づいたのだが、この城の姫様と知らればあまり仲良くなれない
と思つて

素性を明らかにせず、この城で働いてるメイドの子供だと嘘をついて
彼と仲良くなるうとしたのである。

いろいろと話をしてる内に話の内容が王妃の話に移る。

彼の大人達がよくする世間話のひとつであろう、お世辞にも
火国から嫁いできた王妃にあまり良い噂は無い。

同じ火国のつわものでさえ恐れる程に強く、その顔の大きな傷と
鋭い瞳が

周りの人を近づかせないすごみを兼ね備えてる。

父親がリディアを嫁にすると宣言した時には光国コウコクどころか火国ヒコクを巻き込んだの大騒ぎになったそうだ。

光国コウコクの皇子を竜姫が脅迫して結婚させたとか、火国ヒコクの謀略だとか、
か、いやどちらかというコウコクと光国の謀略だというふうに謎が謎を呼び
他国を巻き込んだの大事件の一つとなつたくらいなのだ。

今でこそ両親達の笑い話になつてるが当時は相当大変だつたらしい。

当時の噂は今でも根強く残っておりその中にはリディアの事をあまり良く思つてない人達による悪い噂もあつたりする。

たまたま、その話をルメリアはその男の子を介して聞いてしまったのだ。

話の半分は意味の分からない言葉だが、母親を侮辱している事だけは分かつた。

気付いた時には怒りのあまり男の子の顔を殴っていた。
娼婦しやうぶだとかの意味を知るのもう少し後になるのだが
その内容を詳しく知るようになってから男の人はみな同じような事を考えているのかと思うと若い男の人は嫌いになつていた。

本来ならあやまるべきはルメリアの方なのだが皇女でも有り、
周囲からも恐れられる王妃を侮辱した噂という事も有つて
庭師とその子供があやまりに来るといふ状況になった。

彼らから事の顛末てんまつは一応聞いているが、改めて娘にその真意を聞きたいと思ひ二人だけで話をしているのが今である。

母親はやさしく娘を抱きしめる。

『ごめんね、ルメリア』

『かあさま
母様？』

いつもは見せない母親の悲しそうな表情に少女は驚く。

『醜い母親でごめんね』

母様はいつも誇らしげにその顔にある傷を竜を初めて倒した時に付けられた勲章だと言っていた。

ルメリアにとってもその傷は怖い物では無く憧れに近いものであったので、

自分も母様みたいな勲章が欲しいなとよく言っていた。

それを話すたびに母様に女の顔はとても大切なものなのだから故意に傷付けては駄目だといつもたしなめられていた。

『ごめんね』

母様の頬に一粒の雫が落ちる。

『かあさま
母様………』

幼い頃には分からなかったがその顔にできた大きな傷によって色々

女として苦労した事があったのであろう。

男の人の顔の傷は勲章と言われるかもしれないが、女の顔にできた傷を

うらやましいと思って見る人はいない。

その日以降、王妃はルメリアが事件を起こすきっかけとなった一つである

もう少し母様の事はうまく対処できると思っていましたのに)

今後の事も考えると皇女としてはあまりよくない行動なので
もう少し戒めようとルメリアは今一度決意する。

だが、それ以上にルメリアの興味は別のところにあったりもした。

『そういえば、タクヤ様はどうしてあんなに怒って下さったので
すか?』

『えっ?』

『火霊……様が母様の顔の傷を言った時の話です』

火の聖霊の名前をだしたとたん、その時の怒りがこみ上げて来た
のか

顔の頬が一瞬ひくつくが、何事もなかったかのように話を続ける。

『それは、やっぱり女性の顔は大切なもので

自分のいた世界でも顔と髪は女の命と言いますし』

『あら、そうなのですか?』

世界を超えても女性に対する認識は同じであるのかと
ルメリアは思う。

『タクヤ様もやはり母様は怖いと思いますか?』

『すみません、ちよつと苦手な所があります』

申し訳なさそうに少年はリディアへの感想を正直に話す。

『そうですか……』

予想していた答えだけにルメリアは少し残念そうな顔を見せる。

『あ、いや怖いとかじゃないんです

すごく美人なんでその……』

『えっ?』

少年からの意外な言葉にルメリアは驚く。

『いやその周りにあんな綺麗な人とかいなくて

そのドキドキしたというか、あっ、でも、ルメリアさんが

美人じゃないって言ってるわけじゃないんですよ！』

少年は慌てて言い訳をしようとするがうまく言葉がまとまらずしどろもどろになってしまう。

それを見て白髪の少女はクスクスと笑う。

(あれ？俺、なんか笑われてる？)

『母様は美人だと思いますか？』

『えっ？美人だと思いますよ？』

違うんですか？』

『フッフ、そうですね』

リディアはこの世界では割と悪い意味で有名なほうだ。

火国ヒコクから光国コウコクに嫁いだ王族ではめずらしい人という事もあるが

その特徴的な容姿と竜姫と呼称される程の実力者である事から

ルメリアの想いとは裏腹に国民からは畏怖の象徴として恐れられている。

(この世界の方でないからこそ、そういった物指しで

母様かあさまを見ることが無いのかしらね)

『タクヤ様って変な人ですね』

『え？やっぱり俺って変ですかね？』

少年がいた世界でも周りから年に似合わず妙に達観した人だとか、考え方が老けてるとかいろいろ言われてただけに自覚は多少あった

りする。

『あつ、ごめんなさい』

『悪い意味では無いんです』

『いや大丈夫です』

『同級生からもよく変わってるとか言われるんで』

『あら、そうなんですか？』

あまり多くを語らないその少年から今日はいろいろな人物像を見ることができた。

特に大好きな母の事に関しては周りから良い評価を得たことが無いだけに、今日の彼からもらった言葉にはすごく嬉しいものがあった。

(やつぱり、変な人ですわね)

『聖剣の勇者様と呼ばれる人はそういった事は』

『あまり気にしないのかしらね』

『クスクス』

『ハハハ……』

ルメリアは少年を見て楽しそうに笑い、それにつられる形で少年も笑う。

(あるえええ？私って今すげえ空気じゃねえ？)

楽しそうな二人だけの世界を展開する状況から完全に取り残された火の聖霊は愕然とする。

己の主以外に興味が無い火の聖霊にとっても今回ばかりは見逃せない事態である。

『元気？遊びに来たわよ？』

『…………』

瞑想をする者に黒髪の少女は楽しそうに声を掛けるが
いくら待てども答えは返ってこない。

『あいかわらずだんまりなの？』

早く全てをこちらに委ねてくれれば

すぐにでもあなたの愛する人との仲が

うまく行くようにしてあげるのに』

『…………』

『私は魔王よ』

いずれこの世界の王になる存在

この世界を支配できた後には

あなたの願いをすべて叶えてあげられるのよ？』

『…………』

『フッフ、強情ねえ』

このやりとりはいつもの事なので気にせず

魔王と名乗る者は話を続ける。

『ようやく彼がこちらに来てくれたわね』

3年という時間は長かったけど聖剣の勇者さえ

こちらの世界に来てくれれば後は何もかもがうまくいくわ』

魔王は嬉しそうに微笑む。

『けど、あの人の理想の姿になってまで』

あちらの世界に顔を出したと言っのに

なかなか接触してこなかったわね』

『…………』

『実は自信失くしてたりして？』

もしかして内心焦ってたりした？」

「……………」

嬉しそうな顔で正座をしている者を挑発するような質問をしてみるが目の前の者は反応をしめさない。

「3年間待った彼がこっちの世界に来たのよ嬉しいんでしょ？

ねえ、今どんな気持ちなの？

すぐに会って彼を抱きしめたいって思わないの？」

「……………」

魔王は自分自身を抱きしめる仕草をする。

「ふう……あいかわらずね

まあいいわ、心配しなくても

彼はここにすぐに来ることになるわ」

沈黙を続ける者を無視して、魔王は話を続ける。

「聖霊の力はすごく大きいもの

自分達に制御できない力に弱者は恐怖する

きつと彼はこの世界ですぐに孤立するわ」

「……………」

「今は火の聖霊だとかいうのが邪魔して

すぐには近づけないみたいけど

それについては問題無いわ

既に手は打ってある」

怪しげな笑みを浮かべて自分と同じ姿をした黒髪の女性に魔王は顔を近づける。

「彼はすぐはこちら側に落ちるわ

人の心はすごく脆いもの、フッフ……………」

く。
楽しげに笑いながら魔王は女性の前から静かに闇の中に消えてい

『楽しみにしててね

闇の聖霊様』

魔王と名乗る者の気配がなくなった事を確認して
闇の聖霊と呼ばれた者は静かに目を開ける。

その瞳はこの世界に来た少年と同じ黒。

(火の聖霊が守っているのなら

ひとまずは安心と考えて良いのかしらね)

彼は普通の人間だ。

こちらの世界に来て何らかしらの力が身につければ良いのだが
その確率は決して高くはないだろう。

だとすると、頼れるのは自分と同じ聖霊だけとなる。

魔王の言い方から察するに火の聖霊が彼の身を守っているような
ので、

今は静観をしてもたぶん問題無いであろう。

(そうですか

主様がこちらに来てくれたのですね)

その事実思わず顔の頬が緩んでしまう。

(しかし、喜んでばかりもいられない、本当に大変なのはこれか
らね)

己の主がこの世界に来た事に喜びつつも、警戒するかのよつに
魔王がいなくなった方向に鋭い視線を向ける。

(主様がこちらに来た感覚は既に感じていた
という事は他の聖霊達もその事に気付いてるはず
勘が良いものはすぐにでも主様との接触を試みるはず)

この世界で信じれる者は同じ聖霊のみ。

この世界に生まれてすぐに魔王と名乗る者と接触している闇の聖
霊には

この世界にせまってる危機がどれ程のものかがよく分かっていた。

だが、分かっているにも今は動くことができない。

(あせっても仕方ないわね

今は他の聖霊達を信じるのみ

私は私のやるべき事をやりましょう)

他の聖霊達が己の主と早く接触する事を信じて
闇の聖霊は静かに目を閉じ、また瞑想を始める。

(主様……お気をつけて)

【第二章】登場人物紹介・用語補足・更新報告（前書き）

更新報告

2011/11/12

第14話を追加しました。

会話はすぐに思いつくが、地の文がまったく思いつかない。
スランプかねえ。

1週間で1本ペースも、そろそろ限界かねえ（苦笑）
絵の練習をする時間もとれんしなあ…。

2011/11/14

『火霊と水霊』の挿絵追加。

今週は絵の練習に集中したので、

11/19（土）の小説追加更新はしません。
あしからず。

2011/11/17

『火霊と水霊 その2』の挿絵追加。

過去話に使いそうで使いそうになかったので、
とりあえず、本ページの後書きに追加。

おのれえ…。

【第二章】登場人物紹介・用語補足・更新報告

> i 3 4 9 4 1 | 3 9 9 3 <

登場人物紹介

(ここにある内容は作者の脳内プロットを起したメモであり、内容は本編の話が進むにつれ随時変更されます。挿絵が描けたら追加する予定・・・まあ気分次第かな)

・本条ほんじょう 拓也たくや

黒目と黒髪のどこにでもいる普通の高校生でした、現在は異世界【フレードム】にて聖剣の勇者様として行動中。

かと言って魔法が使えるわけでもなく、お姫様抱っこが軽々できる程度の

筋力が増えた事以外は普通の人。

厄介事に巻き込まれないように無難にその場を切り抜けようとするが、

大抵が聖霊の介入（一部悪ふざけ）によりカオスになる。

口下手。人見知りが激しいが、自分の分身である聖霊には気さくに話す。

趣味は読書、ニコニコする動画鑑賞。

異世界で起こる厄介事をすべて放り出して、早く元の世界に帰りたいのが本音。

・火霊ヒレイ

> i 3 3 7 6 0 | 3 9 9 3 <

・ルメリア（光国の姫様・第一皇女）

髪は長く、白髪。（白髪は光国出身者の特徴である）

陽の光を浴びるとキラキラと光り、白金と例えられる。

笑顔を絶やさず、おしとやかな性格でしたが最近では聖剣復活により崩壊していつてる。というか素が出始めている。

火国の武人達が得意とする動の気と、光国の武人達が得意とする静の気を

操る事ができる稀な人。

火の精霊とすごく仲が悪い。

どんなに怒っても女性の顔は傷つけない事を信念としているが、淫乱聖霊は例外とする。

嫌いなもの：下ネタ（下ネタを言う若い男性も嫌い）

火霊（火の聖霊）

・リディア（光国の王妃）

ルメリアの母。竜姫。

火国出身。

髪と瞳は赤。

竜と戦った時に左目を負傷。（当時12歳）

竜王と呼ばれる現国王の弟の娘。

・フウリン・メイ（光国の城に仕えるメイド）
拓也たくやの身の回りを世話してくれるメイド。
城のメイドの中ではただ一人の風国出身のメイド。
明るい緑色の髪と瞳が特徴的。
家事もできて喧嘩も強い万能メイド。

・ダイナ
光国の城に仕えるメイド長。
赤髪。女性。火国出身。

・ダンネ
愛称はダン。運び屋。
火国出身の運び屋。短髪で赤髪の青年。
たまに言葉遣いが荒くなる時があるが、根は良い人。
実績は有り、その腕を買われ光国からの
多少訳ありな荷物も運んだりする。
見た目は火国出身の人間に見えるが、父親が光国の出身者で、
火の攻撃魔法よりも光の防御魔法が得意。

> i 3 3 2 2 6 — 3 9 9 3 <

・アリサ
水国にてダンネと行動を共にする謎の女。

・サリティア（水国の第一皇女）スイコケ

3年前に突如失踪したミステリアと王族達の謎の変死に
関わったと噂される人物。

王族達や両親たちの死をきっかけに女王となり、いつしか毒姫と
呼ばれ

国民からは恐れられている。

・レイティア

水国の初代女王。

聖剣の勇者様と共に世界を平和に導いた伝説の英雄の一人。
水国の水源ともなる巨大な湖は、初代女王の功績を称え
レイティア湖と呼ばれている。

・エレナ

フウコケ
風国の郷土料理（米料理）が食べられる店

【居酒屋 人魚姫】マメイトの店主

風国のドレスを着て、お客さんを出迎えてくれる。

・アラン（元竜王親衛隊の隊長）
リディアの師匠でも有り育ての親とも呼べる人。
亡きリディアの父の親友。火国ヒコク出身。
リディアの唯一尊敬する人。
竜王親衛隊の隊長という身分でありながらも竜王の事は嫌って
いる。
リディアと同じ年の子供がいる。

〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
その他 〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉

・魔王
3年前に竜の大群を操り火国ヒコクを襲撃。
目撃者によると黒髪に黒目の少女の姿をしていたと聞く。
髪と瞳が黒という人間は異世界には存在しない。

・又シフェル
火靈ヒレイの妄想世界に住む墮天使。
背中から黒い翼を生やしている。
拓也たくやと同じ姿をしており、裸。
主に火靈ヒレイの目の保養担当。

用語補足

・聖剣

伝承によると【封印の間】に1000年以上前から封印されていたとのこと。

拓也たくやの身長と同じくらいの長さが有り、振り回すのにはかなりの訓練が必要である。

鐔つばには聖石をはめるための8つのくぼみがある。

成人男性程の重さが有り、剣というよりは鈍器のイメージが強い。

・聖霊

異世界に存在するエーテル（魔法の素）が人の形を持ち、さらには意思をもったもの。

（召喚者の一部の記憶をベースに構成されている）

旅に出る時は、聖石という形で聖剣の鐔つばにはめ込まれて拓也たくやと共に行動をしている。

特徴としては

（1）エーテル（魔法の素）で構成された体なので通常の攻撃では傷をつけることすら不可能。

（2）魔法を唱えるためには
詠唱 構築式の完成 魔法という手順なのだが、
その過程を完全に無視して魔法を好きなだけ使える。

（ノーモーションで上級魔法を連発し放題。）
（3）聖獣を召喚する魔法はあるのだが、これはあくまで異世界に存在する
生物の形をした魔法を出現させただけであり、意思をもっている

わけではない。

・異世界【フレードム】の世界地図

火	氷
光	水
風	土
雷	

・光国^{コウコク}

拓也^{たくや}が聖剣を抜いた【封印の間】がある国。

・火国^{ヒコク}

7国の中で武力においてもっとも大きな力を持つ国。

本世界で最強とされる生物である竜を倒す程の実力者が多く、竜人と例えられる。

3年前、突如現れた魔王の襲撃により中心地は大きな被害を受ける。

・水国^{スイコク}

水の町というだけあって、中心地は噴水が所々にある。最近、町に亡き姫君の亡霊が出るといふ噂が絶えない。

- ・貨幣（1枚当たりの拓也タクヤの世界での貨幣価値）
 - 銅貨 100円相当。
 - 銀貨 1,000円相当。
 - 金貨 10,000円相当。
 - 白金入り金貨 10万円相当。

- ・古竜こりゅう

1000年以上も前から生きていると言われる竜。
溶岩マグマの中を泳ぐ事もできる程の硬い鱗を持ち、
火国の竜人と呼ばれる実力者達の魔法を受けても
傷一つ付けられない。
過去に聖剣の勇者との約束により異世界の人々には不干涉という
状況であるため
そこまでの脅威は感じられていない。
ただし、大切な卵を壊そうとする者達には容赦なくその牙を向け
る。

- ・魔法印まほういん

手紙を出すために封筒に封をするためのものであると同時に、
差出人を特定するための証拠となるもの。
拓也タクヤの世界での指紋のようなもの。

・魔晶石

魔力を増大させる特殊な石。

ドコク
土国が国の予算をつぎこんで、開発しているモノである。
自国の武力の無さを補うために魔晶石を売ることにより
他国との友好的な関係を築いてる。

【第二章】登場人物紹介・用語補足・更新報告（後書き）

> i 3 4 9 4 0 | 3 9 9 3 <

> i 3 5 2 1 3 | 3 9 9 3 <

第8話 亡霊からの手紙

バタンッ

客室のドアが盛大に開く。

『私に断りなく主様を呼び出すとは、
いい度胸だな淫乱ホワイト？』

だが私の目の黒いうちは……ホギヤー!!』

(お前の場合は、黒というよりは赤だがな)

客室に入って早々蹴り飛ばされ地面を転がる火の聖霊に

少年は心の中でツッコミを入れる。

『誰が淫乱ホワイトですか！』

その下品な言葉遣いをやめないと、蹴り飛ばしますよ!』

(いや、ルメリアさん、既に蹴ってます)

視線を移した先の姫様にも心の中でツッコミを入れる。

『おのれ淫乱ホワイト』

今日という今日は……プギヤー!!』

『まだ言いますか!』

目にも止まらぬ速さで火の聖霊に接近した後にもものすごいスピー
ドの

回し蹴りが放たれる。

(この人って、実は感情的になると口よりも先に手が出るタイプ

だな)

部屋に入った瞬間に始まった謎の戦いにさてどうしたものかと考える少年。

『止めた方が宜しいですかね?』

隣にいるメイドのフウ＝リンが少年に問いかける。

『うん、どうしようかな』

でも、とてもじゃないけど止められる雰囲気じゃないですよね?』

『仮にもルメリア様は、竜姫と呼ばれたりディア様のご令嬢です素人が下手に手を出すと大怪我をします』

少年の問いに真剣な表情でメイドが答える。

『ですよね』

『私はまだこちらに来て日が浅いのですが、メイド長であるダイナ様の

話ですと、これでもかなりおとなしくなった方だそうですね
幼少期は感情的になると、壁を殴ったりしてたくさん穴を開けて、

修理費がかさんで大変だったそうですね』

ルメリアの昔話にメイドが苦笑する。

(なるほど、俺も体に風穴を開けられないように気をつけよう)

『ちなみにリディア様の場合は、幼少期に火国ヒコクの城を全焼させた事が

あるので、それに比べればかわいいものだと言っていました』

メイドがニコリと笑う。

(わ、笑えねえ……)
ルメリアの母親の話に少年の顔がひきつる。

『大丈夫ですタクヤ様、万が一の事があれば私が止めに入りますので』

『え？フウリンさん、これを止められるんですか？』

『はい、一応こちらに仕えてるメイド達は、ルメリア様の護衛もできる事を』

条件に採用されてますので』

涼しげな顔でメイドが微笑む。

(メイドすげえ！家事もできて喧嘩も強いってマジで万能じゃん！)
光国の城に仕えるメイド達のレベルの高さに、少年は目を輝かせる。

(むむ！主様が、メイドと楽しそうに話をしている

はっ！？まさかあのメイド、主様をたぶらかそうと)

主の貞操の危機を感じ取って、火の聖霊が拓也のもとに
駆け寄ろうとするが、そこにルメリアが両手を広げ、立ちふさがる。

『まだ、話は終わってませんよ！』

『ええい！うつとしい、淫乱ホワイトそこをどけえい！』

邪魔者をのけるために火を放とうと構えるが、思い止まる。

(はっ！いかん、主様との約束を破るところだった
あぶない、あぶない)

ふいーと手で額の汗を拭う仕草をする火の聖霊に、鋭い拳が飛んでくる。

『誰が淫乱ホワイトじゃああああー！』

『げぶうつ!?!』

殴られた反動で地面を転がる火の聖霊。

『くそお!調子にのりおつて……火さえ使えればお前など』
わなわなと体を震わせ、目の前に立ちふさがるルメリアを睨みあげる。

(しかし、今日は何も燃やさなければ、主様がおでこにキスをしてくれると

言ったのだ!何としても私はおでこのキスを手に入れ、主様と添い遂げる!)

主様への熱い想いを胸に秘め、少女は宿敵に立ち向かう。

『お前の血は何色だあああ!!!』

『赤だあああ!!!』

火の聖霊からの問いかけに答えつつも、放たれた拳をルメリアはひらりとかわし
カウンターパンチをくらわす。

『グハアア!!!』

宙を舞い、地を転がり、それでも火の聖霊はまた立ち上がる。

(こいつを倒さなければ私は主様のキスを手に入れられない
立つんだ火霊!主様のキスを手に入れるために!)

殴られすぎたせいかわ、だんだん主の約束と己の妄想が
ごちゃ混ぜになってくる。

『主様!ちゅうつう!!!』

『何ですか!その顔は!馬鹿にしてるのですか!!!』

火の聖霊の反論を無視して、少年があやまる。

『ぬぐう……す、すみませんでした』

不満タラタラながらも主^{あいつ}があやまつてるので仕方なくと言った感じで、火霊もあやまる。

『いえいえ、こちらこそお恥ずかしい所をお見せして申し訳ございませんでした』

(もおく私としたことが、どうして火^{ヒレイン}霊の挑発にすぐに乗ってしまったのかしら？戒めなければ！)

『コホン……それでは本題に入りますね』

火の聖霊の挑発に対して、自分の予想以上に感情的になる部分を早く

コントロールせねばと今一度心に決め、拓也を呼び出した理由について語り始める。

『まずは、こちらを読んで頂けますか？』

『はい、手紙……ですか？』

姫様に手渡された手紙を少年は読み始める。

『これは……』

『主^{ぬしさま}様？何が書いてるんですか？』

手紙の内容を読み始め、驚きの表情を見せる主^{あいつ}を見て火の聖霊も覗き込むようにして、手紙を読み始める。

『むむむ？聖剣の勇者様を……噴水の前で待つ？何ですかこれ？』
眉間に皺を寄せて、火の聖霊が主に問いかける。

『誰がこの手紙を？』

『差出人は水国の姫君です』

『えっ？姫様？ど、どういことですか？』

何故、水国の姫様が自分宛てと思わしき手紙を

出してきたのだと、いいかげん困惑した少年の表情に、同じ事を考えたのか、ルメリアも困惑の表情を見せる。

(女？待ち合わせ場所を書いた手紙……ハッ！？といことは、
主様宛てのラブレター！！)

火の聖霊だけ違う答えを導き出し、なぜかルメリアを睨みつける。

『主様をたぶらかす女を増やすとは』

『どういつもりだ！淫乱ホワイどぶうっ！』

すべてを言い終わる前に、火の聖霊の顔にルメリアの剛拳がめりこむ。

『お黙りなさい！淫乱聖霊！』

『ぬおおお！目の前が真っ暗に！主様あ？どこですかあ？』

フラフラと立ち上がり、己の主を手さぐりで探し出す火の聖霊。

『え〜と、自分はその方と面識が無いと思うですが……』

『う〜ん、そこなんですよね』

この手紙には、不可思議な所がたくさんあります

私も真偽を確かめきれずに、困っているのです

亡者のように部屋の中をさ迷う、火の聖霊を無視して二人は会話を続ける。

『ただ、確実に分かっている事が、一つだけあります』

『何ですか？』

『ええ、こちらにその手紙を入れてた、封筒がございまして手紙が入ってたと思わしき封筒を少年に見せる。』

『問題は、此処にある魔法印まほういんというものです』

『魔法印？』

『はい、魔法印まほういんというのはですね、手紙を出すために

封筒に封をするためのものであると同時に、差出人を特定するための

証拠となるものです』

『へえ』

『この特殊な加工をされた魔法印に、己の加護を通して封をするのです』

実際に、封筒に封をする仕草をして、少年に実演してみせる。

『己の中にある加護の作りについては、同じ人はいません

誰が以前、その魔法印に封をしたかの記録さえあれば

差出人の特定が可能なのです』

『ふ〜ん、指紋みたいなものですかねえ？』

『指紋？』

『あつ？いえ、何でもありません、こつちの話です』

ルメリアは一瞬不思議な顔をするが、何事もなかったかのように話を続ける。

『彼女とは面識が有ります』

『以前、手紙のやりとりもしてましたし、記録も残ってます』

『はあ……』

記録が残って、姫様からの手紙だという確証がとれても

結局なぜ面識の無い自分宛てに、手紙が来たのかの理由が分からない。

腕を組み、少年は考え込む。

『これは間違いなく、水国の第二皇女であるミスティア姫からの手紙でしょうね』

ただ……』

『ただ？』

話を続けたものか、どうしようかと悩む姫様に、少年は首をかしげる。

『どうしたんですか？』

『それが……』

『？』

意を決したように、ルメリアは話を続ける。

『亡くなってるんです』

『えっ？亡くなってる？どういうことですか？』

『正確には3年前に突如行方をくらまし』

水国の公式発表では、亡くなった事とされてるのです』

『つまり？』

『この手紙は亡くなられたはずのミスティア姫からの』

タクヤ様宛てに届けられた、手紙ということになるのです』

その驚きの事実に少年は息をのむ。

『はい、私も驚いています』

母様かみさまとも相談したのですが

この件に関しては、タクヤ様にも協力をお願いしたいのです』

『と言いますと？』

『この件については、真偽を確かめに水国へ調査に行ってほしいのです』

真剣な表情でルメリアにお願いされ、少年は今一度その手紙を見る。

『観光目的という事で入国許可を求めているのは良いが
遠まわしに、この者が見たいものは極力嘘偽りなく開示せよ
という言い方なのが気になる』

まるで王族級の扱いだなと、手紙の文面を睨みつける。

『光国コウコクの大切な客人とあるが……

たしかに、私の知っている王族の中には無い名だな』

自分の記憶の中にある各国の王族の名前を今一度呼び起こし
照合してみるが、同じような名の者が出てこない。

『まあ、いい……

竜姫が何を考えて送りこんで来るかは分からぬが
すぐに正体をつきとめてやる』

適当な監視でもつけければ良いかと独り言を言い、手紙を握りつぶ
し放り投げる。

『フフフ……

ホンジョウ タクヤ殿よ、せいぜい観光とやらを楽しんでいけ』

怪しげな笑みを浮かべる女性が見下ろした先に、どこからともなく
大蛇が現れる。

『ただし、水国スイコクには凶暴な蛇が多くてな……』

大蛇は女性を一瞥した後、舌を何度かチロチロと出し、餌と勘違
いしたのか

口を大きく開け、床に落ちた手紙をゆつくりと飲み込んでいく。

『この国の蛇の牙にある毒は猛毒ゆえ、

せいぜい余計な詮索をして噛まれぬようにな』

床を這いずりまわる大蛇を見下ろし、邪悪な笑みを浮かべ、
クスクスと笑う水国の王女の瞳が蒼から、仄暗い紫色に染まる。

第9話 レイティア湖の記憶

3年前

『どうした、ミスティア？』

私をわざわざこのような所に呼び出して

大事な話とは何だ？』

『……』

夜風にその身を任せ、涼しげな顔でレイティア湖をみつめる女性とは

対照的にその横に立つ少女は厳しい目で女性をみつめる。

『お姉様、どうしてですか？』

なぜこのような事をするのですか？』

『何の話だ？』

大きな湖の上にある切り立った崖に対峙する二つの影。

『最近臣下の者達の不審な死が目立っております』

『それがどうした？』

『彼らは皆、お姉様に反感を抱く者たちでしたが』

今回の件に関しては何に余るものがあります』

『ほう、その言い方から察するに』

私が手を出して殺したと言ってるのか？』

問いかけられた女性は涼しげな顔で目の前の少女を見つめる。

『……』

『証拠でもあるのか？』

『証拠はありません、しかし……』

少女は目の前の女性を見上げる。

『何か隠し事をなさってるのではないのですか？』

『隠し事？何も隠してなどいない』

少女の問いかけに女性はフッフと笑う。

『最近のお姉様には不安な感じます』

この世には存在しない魔力という言い方が正しいのかは分かりませんが

私達王族が使う水の魔力とは違う何か、邪悪な気配とでも言うような……』

『……』

邪悪な気配という言葉に反応した女性の表情が曇っていく。

『！！？』

次の瞬間、女性の背後から黒いもやのようなものが現れる。

無言で少女を見つめる女性から、今まで感じた事のない魔力を感じとって

少女が言葉を止める。

『感が良すぎるのも困りものだな』

やはりお前だけはごまかせんか、ミステリア』

『お姉様？』

寒気にも似たその感覚に少女が後ずさる。

『お姉様、何ですかそれは？』

『私はお前が嫌いだった』

少女の問いかけを無視し女性は独り言を呟く、懐から出されたその手には

闇夜に浮かぶ月の光に照らされたナイフが光る。

『幼き頃から天才と呼ばれ、その魔力の強大さから

初代女王であるレイティア姫の再来とも言われたお前が……』

『お姉様？』

ゆつくりと近づいてくる女性に異様なものを感じ、少女は後ずさるが

逃げ場は無く、後ろを見下ろすと切り立った崖から巨大な湖が見える。

『お姉様、その目は？』

女性の蒼く煌めいてた瞳が黒に染まっていく。

『まさか、闇に堕ちてしまったのですか？』

驚愕の表情を浮かべる少女に静ずかに女性が近づく。

『さようなら、ミステリア』

サクリと小さな音が静寂の闇の中に聞こえ、少女が後ろによるめく。

『お姉様……』

腹から溢れ出る血を押さえ、悲しそうな表情を見せ、目の前の女性に何かを

言った後、少女は崖下に落ちていく。

女性はその巨大な湖を見下ろすと、水面が大きく波打っていた。

『…………』
『これで邪魔者は消えたわね
後はあなたの好きなようにやれば良いわ』

無言で湖を見下ろす女性の背後から出ていた黒いもやが
人の形となる。

『…………』

『さあ、湖にあれを落として

そうすればこの国の者たちはあなたの意のままとなる
誰も逆らうことのないあなただけの国が、フッフ』

長い黒髪をなびかせ、うれしそうに少女が笑う。

『どうしたの？まさか今更怖気づいたとでも言うの？』

『…………いや、何でもない』

そう言っただけで女性は懐から小瓶こびんを取り出す。

小瓶の中を見ると、どろりと黒い液体がその中で意思を
持つてるかのように蠢いてる。

ナイフの刃に己の指の腹を当てゆっくりと動かす。

そして、小瓶の蓋を開けその中に己の血を入れる。

しばらくした後小瓶の中にあつた液体が黒に近い紫色に変化す
る。

血を吸いこんだためか液体が更に激しく蠢く。

『魔王とやら、本当にこれを落とせば私に絶大な力が入るの
だな？』

『そうよ、それであなただけはこの世の誰にも負けない強大な魔力を

湖の中を泳ぐ一つの影がある。

(綺麗……)

昼とは違い、月の光に照らされ蒼く透き通った美しい夜の顔を見せるその湖に

魅せられ、それは嬉しそうな表情を浮かべる。

(フッフ、ずっとこの中でこうしていたいけど

そろそろ外の世界にも出ないとね

体の使い方もだいぶんかかってきたし)

己の体を確認するような仕草をし、それは湖の中をゆっくりと泳ぐ。

(ここはすぐく居心地が良いからなかなか出たくないんだけど

探しモノもしないと行けないしね)

今日は月が綺麗なので、なんとなく外に出たい気分になり、それは地上を目指して

楽しそうに泳いでいく。

ドボオオン!

突然、頭上に何かが落ちてくる。

湖に棲む者は驚いたような表情を浮かべ、おそろおそろ落ちて来たものに近づく。

(何かしらコレ？)

人？女性かしら？)

己の中にある断片的な記憶から、落ちて来たものが女性であると判断する。

(この赤いのは何かしら？)

落ちて来た女性から、湖の中に広がるようにあふれだす赤い液体に、

湖に棲む者は目を鋭く細める。

(血ね……お腹からでてる

ん？刺されたの？)

女性の腹から血が出てるのを確認し、その血の記憶をのぞいてみる。

(かわいいそうにね

まあ、私にはどうする事もできないんだけどね)

湖に棲む者は落ちて来た女性を回収し、地上に向かって泳ぎだす。

(とりあえず、このままじゃ死んじやいそうだし

適当に外に放り出して置いとけば良いかしら？)

せっかく綺麗な湖を楽しんだのに、湖を赤く染めるそれに台無しにされたと

不機嫌な表情を浮かべつつ、どうしたものかと考えながら湖に棲む者は泳ぐ。

ポチャン

女性が落ちて来た所と同じ所にまた何か落ちてくる。

『!?!?』

次の瞬間落ちて来たものがものすごい勢いで湖の中に広がります。

『何これ!?!?気持ち悪い!?!?』

何か落ちてきた所に視線を移すと、透き通るような蒼い湖が黒に近い紫色に

染まり始めていた。

吐き気をもよおすようなそれに、湖に棲む者は驚愕の表情を浮かべる。

『湖が……汚れる!?!?』

湖に棲む者は蒼い瞳を煌めかせ、両手を広げ、急いで己の中にある魔力を

全て解き放つ。

湖の中が強大な魔力に包まれ、湖への浸食が止まる。

(とりあえず、浸食は食い止めれたかしら?)

なおも広がろうとするそれを湖の表面部分でなんとか隔離する事に成功し、

安堵の表情を浮かべるが、次の瞬間には怒りの表情を浮かべる。

(こんな綺麗な湖を汚そうとするなんて許せない!)

怒りに震え、落ちて来たものをそのまま返してやろうと、

何が上で起こってたかを調べるために、先程落ちて来た少女から

血の記憶を探る。

目の前にいる女性と何かを言い合ってるような映像が見える。しばらくした後突然、記憶の持ち主が女性に刺される。ふらつきながらお腹をおさえ、記憶の持ち主が後ずさる。さらにとどめを刺そうとするつもりなのか、目の前の女性がゆっくりとこちらに近づいてくる。

『お姉様、私はやはりいらない子だったのですね？』

その言葉は目の前の女性に言ったものなのだろう。その言葉を聞いて、女性の動きが突然止まり、苦しそうな表情を浮かべた所で記憶が終わる。

『……………』

湖に棲む者はしばらく考えるような表情を見せた後、少女と一緒に落ちて来たナイフを回収し、既に意識を失ってる少女と共に仄暗い湖の底へゆっくりと沈んでいった。

第10話 異国の旅（前書き）

今回は苦手な戦闘描写にも挑戦してみました。
戦ってる雰囲気少しでも伝われば、これ幸い！

第10話 異国の旅

『この森を抜けたら、すぐに水国スイコクが見えます』
『……………』

街へと続く街道をガタガタと揺られながら、森の中を荷馬車が移動する。

『この辺の道は舗装されてないので、少々揺れますが、もう少しの辛抱です』

『……………』

荷馬車を誘導する赤髪の男が、心配そうに中にいる少年に声をかける。

しかし、少年は男の問いかけに答える事は無く、終始うつむき加減で

大きな剣を腕にかかえるような体勢で目を閉じている。

『んっ？何だあれ？』

赤髪の男が視線を前に移すと、フードを頭から被った怪しげな人が道を遮るように立っている。

『はいはい、止まって止まって
まったく、何だよ、もお……………』

馬を止め、若干いらただしげに男は荷馬車から降りる。

『おいおい、道の真ん中で何やって、うおっ！？』

声を掛けようとした瞬間、目の前の人間が腰に下げた鞘から剣を引き抜く。

そして、フードの中から金の瞳を輝かせ、剣を構える。

『抵抗するな、抵抗しなければ、命までは取らん』

男が何か指示を出すと、森の中から複数の人間が出てくる。

『はあ、盗賊かよ』

『ついてないな……』

『悪いが金目のものをもらっていく』

ため息をつく赤髪の男に、フードを抜いだ金髪の男がニヤリと笑う。

『てやんで、バアロオオ！』

こっちはどんな荷物でも確実に届ける、一流の運び屋で通っているんでい！』

荷馬車から降りた赤髪の男は、周りを取り囲む者達を睨み返し、腰に下げた剣を鞘から引き抜く。

『盗賊が怖くて、運び屋がやってられっかよ！ペッ！』
手に荒らしく唾をかけ、剣を構える。

『フンツ！後悔するなよ！やれっ！』

リーダーと思わしき男の号令の下、周りを囲んでいた者達が被ってたフードを脱ぎ、

剣を構える。

男達が詠唱魔法を唱えると、その剣に激しい光が走る。

『けっ！雷国ライコクの連中が盗賊の真似事かよ』

『クッククック、降参するなら今のうちだぞ』

『誰が、降参するかよ、

おらよつと！隙ありっ！』

瞬間、男は目にも止まらぬ速さで一人の男に近づき、反射的に振り下ろされた

剣を跳ね返し、回し蹴りをくらわす。

『ぐはっ！』

『こいつ、できるぞ！油断するな！』

『オラオラ！どうした、どうした！』

男に飛び掛ってくる者達の攻撃を、己の剣で巧みにはじき返す。

『ちっ！調子に乗るな！

これでも喰らえ！』

リーダーが詠唱魔法を唱え、男の隙をついて手から雷を放つ。

『ぐああああ！』

『今だ、殺れ！』

雷にうたれ、倒れそうになる所に一人の男が駆け寄る。

『なんちって』

『！？』

瞬間、近づいてきた者に回し蹴りをくらわし、その肌から小さな

光の粒子を
撒き散らし、男はニヤリと笑う。

『その魔法は……』

貴様、火国の者では無いのか!？」

『残念、俺の得意魔法は光だぜ!』

してやったりと赤髪の男はニヤリと笑い、動揺する盗賊達に飛び掛かる。

『おい、何か劣勢っぽいぞ』

『チツ!何やってんだあいつら』

とりあえず、金目のものだけ取っていくぞ』

赤髪の男にはれないように、森の中から荷馬車の陰に隠れるようにして

近づいてきた盗賊達が、荷馬車の中に入ろうとする。

『早くしろよ!』

『分かってるよ、オラオラ抵抗するな』

抵抗すれば殺すぞ!』

荷馬車の中にいる少年を脅すように、盗賊の一人が中に入る。

『おっ?綺麗な宝石じゃねえか』

グツヘツヘツ、その剣をもらっていくぜ』

おびえているのか、体をプルプルと震わせている少年の剣を奪おうとした瞬間、

男は輝くような紅色の光に包まれる。

『ぎゃ あああああ！』

『な、なんだ？』

荷馬車の中から突然叫び声がし、男が荷馬車の中から飛び出る。

『アチー！アチチチチ！』

飛び出た男が地面を転がる。よく見ると髪の毛が燃えており、男は必死に火を消そうともがいている。

『何だてめえは！？』

男達が荷馬車からでてきた赤髪の少女を睨む。

少女は男達の問いかけを無視し、何かを探すように周りを見渡す。

『何を遊んでるんだあいつは？』

少女は不機嫌そうな顔をして荷馬車を降りると、周りを取り囲んでる

男達を無視して歩き出す。

『てめえ！無視してるんじゃない！』

一人の男が少女に剣を振り下ろす。

ジュウウウウウ

『へっ？』

男が振り下ろした剣を持ち上げると、少女に触れた部分が無くなっていた。

正確には消えているというよりは溶けているという感じであり、

無くなった

部分からは強烈な熱気がでている。

『ふむ、なるほどな

お前達が原因か』

剣を構え荷馬車を取り囲む男達を一瞥した後、少女はようやく今の状況を理解したという風に頷く。

『てめえ！ふざけんな！

俺の髪を燃やしゃがって、ぶっ殺してやる！』

髪が焦げた男が怒りの表情をあらわにして、少女に近づく。

目の前の少女は、声を掛けてきた男に視線を移し、ニヤリと怪しげな

笑みを浮かべる。

『そう言えば、さつきお前、主様を殺すとか言ってたな？』

次の瞬間、少女の背中から炎が左右に走り、それが翼の形になる。少女の周りにいた男達が突然のできごとに悲鳴をあげ、逃げ出す。

『ヒイツ！？』

少女から放たれる強烈な殺気に目の前の男は腰をぬかして、地面にへたりこむ。

『やってみろよ？』

お前がどれだけできるのかは知らんが、主様に手を出すというのなら

私が相手になつてやる』

少女はその瞳を大きく見開く。笑みを浮かべるその口は耳まで裂けている。

男を睨む少女の体が紅色に発光し、炎に包まれる。

炎はみるみるうちに大きくなり、天高く舞い上がり、その先にあるものが

男を見下ろす。

『ひ、火竜だと？

なんだこいつは？』

赤髪の男と対峙していたリーダーらしき金髪の男が、驚愕の表情を浮かべる。

『おいおいおい、護衛もつけねえから何事かと思つてたけど、そういふことかよ』

赤髪の男が苦笑を浮かべる。

『チツ、撤収だ！』

舌打ちをし、リーダーが他の者達に合図をする。

『ちよっ、ためえ逃げてんじゃねえぞ、コラァ！』

赤髪の男を無視して、盗賊達は蜘蛛の巣を散らしたように森の中に逃げていく。

荷馬車の周りにいた男達も撤収の合図を受け、慌てて逃げ出す盗賊達の

うちの一人が足をもつれさせ、荷馬車にぶつかる。

ガタガタと大きく揺れる荷馬車から、黒髪の少年がよろよろとでてくる。

その顔はひどく青ざめており、傍から見ても体調が悪いのすぐに

『いやあ、護衛も付けずにいた理由をすごく疑問に思っていました、
が、

上級魔道士のかたでしたか』

『いえ、別に魔導士とかじゃないんですけどね』

『またまた、聖獣召喚の中でも竜召喚の類は最も難しいとされています』

『ああ、みたいですね』

『リディア様から大切な客人と言われて、俺一人でどうやって護衛したものと』

悩んでましたが、なるほど、先生程の実力者の方でしたら、たしかに護衛は

必要ないですね』

納得したように男はうなづく。

『あのお、ダンネさん』

その先生って言い方やめてもらえませんか』

『ダンです』

『えっ？』

『親しい人間からはダンと呼ばれてます』

いやあ、しかし大先生の魔法はすごいですね』

『ええつと……』

『俺の知り合いにも竜人と呼ばれるようなすごいやつがいるんですが』

そいつも火竜を召喚できるんですよ』

あつ、でも、人型の召喚は初めて見ました』

そう言っつて男は荷馬車の中にいる、赤髪の少女を見る。

『あのお……』

『あつ、ちなみに俺は見た目が火国出身に見えますが
親父が光国出身者でしてね

得意魔法が光だったりするんですよ』

『はあ』

『光魔法って言うのはですね

攻撃魔法としては使いにくい所が多いんですけど、防御魔法としては

どんな属性魔法からも身を守れるので、結構便利ですね』

荷馬車を誘導させながら、男は嬉しそうに少年に語る。

本当は呼び方の訂正をしてほしかったのだが、いつの間にか先生から大先生に

昇格した事に少年はため息をつく。

『この人はどうするんですか？』

黒髪の少年が若干疲れたような表情で視線を荷馬車の中に移す。

『あゝ、そうですね

とりあえず、仲間の一人は捕まえたので、他の逃げたやつらを捕まえるために、水国の警備隊スイコクに身柄を渡しておきます』

少年の視線の先には、縄でしばられ火の聖霊に燃もやされたのか髪がチリチリの

状態になつてる男と、睨むような視線で見下ろしている赤髪の少女が男の前に立っている。

『ガールルル』

『ヒイツー！』

何か気にいらぬ事でもあるのか、少女が同席している男を威嚇し、男が怯える。

(うーん、さっきから威嚇してるけど、盗賊の人とは言え、何か、
かわいそうになっってくるな)

『火霊……こっちに来い』

少年が火の聖霊を手まねくと、少女は男との視線を外さないようにしながら

少年に近づいてくる。

『火霊、おすわり』

『ガルルルル』

男を睨みながら、少年の隣に座る。

『火霊、お手』

『ガルルルル』

男を威嚇ながら、少年の手に己の手を乗せる。

『火霊、威嚇』

『キシヤアアアアア!』

『ヒイイイ!』

少年と手をつなぎながら、口を大きく開け牙をむき出しにし、男を威嚇する。

(器用な事をするなこいつ、でも手をつないでることには気付かないんだな)

いつもの火霊だと手などつないだものなら、性的なサインだと勘違いして

飛び掛ってきそうだが、今は意識が盗賊の男に集中してるためかまったく気付く様子が無い。

(なるほどな)

少年が何かを納得したように頷く。

『おお、すごいですね』

黒髪の少年と赤髪の少女の一連のやりとりを見て、男が感心したような表情を見せる。

『しかし、先ほども思いましたが火竜を操る程の人型の聖獣召喚となると

かなりの魔力を使うのではないのでしょうか？

俺が心配するのもしかと思えますが、大丈夫ですか？』

『何がですか？』

『いや、火竜の召喚っていうだけでも詠唱にかなりの時間がかかるので

大抵の人はその構築式を魔法発動する直前の状態まで完成させて、

己の加護に納めてますよね』

『そうなんですか？』

『ん？あれ？ん？』

違うんですか？えっ？』

(あつ、やべえ、俺もしかして非常識な発言をしてる？)

『あつ、そうですね、そうですね！』

そんな感じです』

慌てて、少年が男に話を合わせる。

光国の城を出るときに、姫様から聖剣の勇者という存在はこの世

界では

おとぎ話のような存在で、この世界の常識に囚われない事が多々あり、

いろいろと質問攻めされる可能性があると言われたのを思い出す。

『ですよね、あくびつくりしました

大先生、脅かさないで下さいよ!』

(正直、自分でも説明できない事が多いからな

適当に話を合わせとくか)

『えっ、でもそうになると、やっぱり必殺の魔法になるわけですね?』

すみません、俺何かのためにそんな魔法を使わせちゃって』

なぜか、男が申し訳なさそうな顔をする。

『あつ、いえ、大丈夫ですよ』

『おお!さすが、大先生!!』

魔力の器もでかければ、人としての器もでかいですね!

おみそれいたしやした!』

『えっ?あ、はい……!』

この雰囲気だと言ってもおかしな方向に転びそうなので、少年は仕方なくうなづいておく。

『あ、助かります

この事がリディア様にでもばれた日には、護衛もまともにできないのかと

仕事をくれなくなって、干されてしまう可能性もありますからね

恩にきります』

『リディアさんって、やっぱり怖い人なんですか?』

『そりゃあ、竜姫って言われるような方ですよ？』

えっ、もしかして怖くないんですか？』

『うーん、あんまり怖いイメージは無いですね……』

『おお！さすが、大先生！！』

竜姫さえも恐れないその力強さに、俺は感服しました！』

男は目をキラキラ輝かせ、少年をみつめる。

『ぜひぜひ、今後とも何かあればうちをごひいきにしてください！』

大先生と一緒にいたら、どんな旅も安全ですね！』

先程、吐いた事で少し酔いが醒めて、気分が落ち着いてきたのだが、
水国にたどり着くまでは終始こんな会話が続くのかと思うと
少年は再びめまいをおこしそんな感覚になる。

『いやあ、楽しい旅になりそうですね！』

『はあ、そうですね』

嬉しそうに笑う赤髪の男とは対照的に、黒髪の少年は深いため息をつく。

第11話 噴水前の出会い

『スウー……ハアー』

大きく息を吸いこみ、そしてゆっくり吐き出す。

修練場にて、呼吸を静かに整える一人の少女の姿がある。

その少女の前には砂袋が吊るされており、少女は何かを確認するように、

幾度となく握り締めた拳を、砂袋に触れては引いて戻すという作業を繰り返している。

『スウー……』

最後にまた大きく息を吸い込みつつ、瞳を閉じる。

修練場に一瞬の静かな間が出来る。

『ハッ！！』

次の瞬間、少女は燃えるような赤い瞳を見開き、流れるように腰を落とし

せいけん突きを放つ。

ドゴオオン！！

打ち抜かれた砂袋が、宙を舞い上がる。

天井に届かんばかりに舞い上がった砂袋を少女は一瞥し、呼吸を整え、また構える。

『スウー……』

大きく息を吸い込みつつ、重力によって勢いよく落ちて来る砂袋に、

タイミングを合わせるように広げた手の平を突き出す。

『ヒュッ！！』

ボスンツ！！

次の瞬間、少女から流れるように静かに放たれた掌底てのひらにより、少女を吹き飛ばさんとばかりに勢い良く落ちて来たそれは、少女の手によって勢いを相殺され、ピタリと止まる。

『よし、良い感じですね』

そう言って頷く少女の瞳からは、紅色の輝きは既に無く、その肌と髪からは白金プラチナの粒子をキラキラと周りに振りまいている。

パチパチパチ

『お見事です、ルメリア様』

少女が音のする方に視線を移すと、両手を叩き、嬉しそうな顔でこちらに近づいてくるメイドの姿がある。

『あら、ダイナ

来てたのですか？』

『はい、たまたま修練場の近くを通りかかった時に人の気配がしましたので覗いてました』

そう言って、メイドは砂袋に視線を移す。

『しかし、随分腕を上げましたね』

私も火国の武人達が得意とする動の気を操る事はできませんが、

光国の武人達が得意とする静の気を操る事はできません』

『母様かあさまや父様とうさまに比べれば、私なんてまだまだですよ』

少女はメイドに褒められて、恥ずかしそうに微笑む。

『いえ、その年でここまで見事に操られる者はそうはいません、

私が保証します』

『ありがとう、ダイナ』

しかし、次の瞬間にはメイドの顔は暗い表情になり、少女を心配そうにみつめる。

『しかし、大丈夫なのですか？』

そのように体を激しく動かしても、また以前のように発作を起こしたりはしませんか？』

『フッフ、大丈夫ですよ』

最近は体の調子も良くて、前のようにすぐに高熱が出る事も無くなりましたので、心配しないで下さい』

ルメリアはメイドを安心させるように微笑む。

『そうですか？』

それは安心しました』

『特に感情が大きく高ぶる事が無ければ、昔みたいに物を壊したりしませんよ』

恥ずかしそうにそう言って、砂袋に手を当てながら

少女は最近の記憶を思い出す。

(一番最近、怒ったのだって……)

次の瞬間にルメリアの脳裏に浮かんだのは、少女の姿をした火の聖霊。

火霊と名乗るそれが、記憶の中で怪しげに微笑む。

(淫乱ホワイト……)

ピクッ

頬の筋肉がひきつる。

(なんだ？淫乱ホワイト)

記憶の中の火霊がルメリアを馬鹿にした表情でこちらを見ている。

ピクピクピクッ！

こめかみの血管が浮き出てくる。

(ブフォオ！淫乱ホワイト!!)

最後には吹き出して、こちらを指差し、ウケケと笑い出す。

ブチンッ！

『誰が淫乱ホワイトじゃああああ!!』

瞳を燃えるような紅色に輝かせ、怒りの鉄拳を砂袋に向かって打ち抜く。

ドシュンッ!!

『あつ!?!』

声を出した瞬間には時既に遅く、砂袋をルメリアの拳が貫いており、砂袋から

サラサラと砂が落ちて来る。

『ああ、やってしまいました……』

頭を抱え、少女は悲しそうに砂袋から落ちる砂を見つめる。

『だ、大丈夫ですよ』

後で私が片付けて置きますので』

『ごめんなさい、ダイナ』

苦笑するメイドにあやまりながら、少女はため息をつく。

『私もまだまだですね』

『フッフ、ルメリア様はまだ若いので、焦る必要はありませんよ
どうですか? せっかくなので一つ稽古の相手でもしましょうか

?』

『あつ、本当に? ぜひ、お願いしたいわ』

『そうですね、それでは着替えをしてきます』

今のルメリア様の實力ですと、さすがにメイド姿のまま相手
をするのは

難しそうなので』

しばらくお待ちくださいと言って、メイドは更衣室に着替えをする
ために

その場を離れていく。

メイドの後ろ姿を見送りつつ、少女は物思いにふける。

(そろそろ、タクヤ様も向こうに着いた頃ですかね

『ていうか、場所は書いてても、日付も時間の指定も無いんじゃない
会う事が難しいような気が……』

今更ながらに気付いた事実にも、黒髪の少年は苦悶の表情を浮かべる。

(ていうか、国の姫様がこんな所で待ってるとも思えないし、
誰か代わりの人が来るとしても、お互い面識も無いんじゃない
ぶっちゃけ会うのは無理じゃね?)

はあと大きくため息をつき、少年は背負ってた長剣を隣に下ろし、
噴水に腰掛ける。

どうしたものかと考え事をしつつ、噴水から流れ出る水に視線を
移す。

(へえ、綺麗な水だな、天然の水なのかな?)
底が見えるくらいに透き通った水を手ですくい、匂いを嗅いでみ
る。

(消毒液の匂いはしないし、山から流れて来た自然の水なのかな
?)

さすがに水国スイコクと言われるだけの事は有り、水をふんだんに
使った施設が多い。

噴水が街の所々に有り、ここに来るまでも随分、迷いながら歩いて
きた。

最終的には、手紙にも書いていた噴水の中心に立つ、美しい女性
の姿をした石像が

目印となり、なんとかたどり着けたのである。

（聖剣の勇者様と共に世界を平和に導いた姫君

水国^{スエコク}初代女王 レイティア姫か……）

噴水の近くにある文字を刻まれたそれには、その石像の女性を記した名前と

その輝かしいばかりの業績^{オトコノサト}が書かれていた。

その内容から察するに、かなりすごい人なのであったのだろう。

（思えば遠い所に来たもんだな

本当にいつか、元の世界に帰れるのだろうか……）

突然この世界に飛ばされ、周りに流されるままなんとなく

今日まで過ごしてきた。

今振り返れば、小説の中だけの世界だと思ってた魔法や聖霊が出てくる

異世界での出来事に驚かされるばかりであった。

（もし、元の世界に帰れたとしても

誰も信じてくれないだろうなあ）

少年は自嘲気味な笑みを浮かべつつ、まずは目の前の問題をどうやって

解決しようかと思考を巡らす。

（ん？魚？）

ふと、噴水から流れる水の中に視線を移すと小さな影がこちらに近づいてくる。

バシャン！

『冷たっ！？』

それが少年の前まで来たかと思うと、突然跳ね、水が少年の顔にかかる。

『ちよっ！？何だよもお……』

服の袖で顔の水を荒々しくふきとる。

『へえ、綺麗な石ね』

魔力を感じるから魔晶石かしら？』

少年の隣で突然声がして、隣に視線を移すと一人の少女が、少年の長剣の
鍔つばにはめられた聖石を指の腹でなでていた。

『あら、こんにちわ』

『あつ、こんにちわ』

『ごめんなさい、めずらしい物を見たので
つい触ってみたくなっちゃって』

『えっ、あつ、良いですよ別に』

短い蒼髪をなびかせ、少女は少年の隣に座る。

『お兄さん、もしかしてこの街は初めて？』

『えっ？はい、そうですけど……』

『フフフ、やっぱり？』

さっきから周りをキョロキョロしながら

不安そうに歩いてたから初めてなのかな？って思ってた』

そう言ってる、少女は微笑む。

(げっ、もしかして見られたのかな)

そんなに目立つような行動はしてなかったはずと思いつつ、

何度も地図を見ながらこの辺りをうるついでいたから、

周りから目立って見えてたのかなと思うと、少し恥ずかしくなって少年は若干赤面してしまう。

『こちらに来たのは、観光か何か？』

『はい、観光です』

『一人なの？』

『連れはいるんですが、ちょっと用事があるらしく』

今は別行動してるんです』

『ふ〜ん、そうなの』

少女は視線を宙に移し、何か考え事をするような表情をした後、少年に視線を移し直して微笑む。

『ねえ？もし良かったら私を買わない？』

『えっ？買う？』

『あ〜、別にいやらしい意味で言ってる訳では無いのよ？』

私、この町では情報屋の仕事してるの』

『情報屋？』

あまり聞かない言葉に少年は訝しげな表情を見せる。

『そう、この国では結構多い職業よ、知らないの？』

『自分この国は初めてなので、あんまり知らないんですよ』

『そうなの？じゃあ、なおさらね』

この国は私にとっては庭みたいなものよ

行きたい所があるなら、どこへでも連れて行ってあげるわよ』

『へえ、どこへでもですか？』

『そうよ、どこでもよ』

もちろん、その分の報酬はもらっけどね』

少女はニヤリと笑う。

『観光の期間はどれくらいを予定してるの？』

『1ヶ月くらいかな？』

『そう、じゃあ、白金入り金貨3枚で仕事するわ』

『えっ、3枚！？』

こちらの通貨は下から、銅貨、銀貨、金貨、白金入り金貨ブラチナという順番で価値が上がっており、この噴水の場所まで来るまでに見つけた宿には

一泊銀貨5枚と書いていた。

自分の世界でホテルに宿泊した時の値段が一泊5000円であるから、

銀貨10枚で金貨1枚、銀貨100枚で白金入り金貨1枚の

価値があるというルメリアからの言葉を信じると、目の前の少女から言われた

値段は30万円相当になると予想される。

(いくらなんでも、高過ぎるだろ)

ちなみに光国の姫様から旅の駄賃としてもらったのは、

白金入り金貨5枚、つまり手持ち金の半額以上を支払う事になる。

『この街で腕利きの専属の情報屋を雇おうとすれば、大抵それくらい

価値になるわよ、でも良い仕事するわよ？

もし、良ければ紹介料も含めて、格安の宿も紹介してあげるし、実際に観光したい施設まで、同行もしてあげるわよ』

『うーん、でもやっぱり高過ぎます』

少年はため息をつき、腰を上げる。

『すみません、とりあえず観光は、連れの人に案内してもらおう事にします』

『そうなの？残念ね』

寂しそうな顔をする少女を一瞥した後、少年は長剣を持ち上げてその場を立ち去ろうと少女に背を向ける。

『それって、聖剣でしょ？』

背中から掛けられた言葉に少年の足が止まり、思わず振り返る。

(俺って、まだ聖剣の話をしてないよな？)

たしか、ルメリアさんもこの世界の人で聖剣の事を知ってる人はほとんどいないって……)

『ちなみにその石は、せいせき聖石ってやつでしょ？』

少年が振り返った先にいる少女は、噴水に座ったまま視線を宙に向け、

足をパタパタと上下に揺らしている。

『この情報は、たぶんこの国の人はまだ誰も知らないわよ

ちなみに私は、この街では一番の腕利きの情報屋よ

まあ、信じる信じないは、あなた次第だけどね』

少年から向けられた視線に、わざとらしく気付かないふりをしながら

(とりあえず、水国の国境警備隊には盗賊の身柄は渡したし、タクヤ様とも進展がなければ夕方くらいでいつも俺が泊まる宿で合流するって話をしてるしな)

それまで、どうやって時間を潰そうかなと男は目を閉じる。

『へえ、暇なんだ』

荷馬車の下から誰かの声がする。

『……』

しかし、男は何事もなかったように無言となり、気配を殺すように息を潜める。

『へえ、私を無視するとは良い度胸ね』

そう言つと、突然何者かが男の上に移る気配がする。

『そんなやつにはコレをくれてやる』

一瞬、危険な気配がして男が目を開くと、一人の女性が宙高く舞い上がり

男の顔に蹴りを入れようと飛び降りて来ている。

ドスンッ！

『ぬおっ！？てめえ、何しやがる！

あぶねえじゃねえか！？』

寸前の所で女性の蹴りを避け、男は怒りの表情で起き上がる。

『フンツ！私を無視するお前が悪いんだよ』
女性は左手を腰に当て、右手で蒼に染めた髪をかき上げ、男を見下ろす。

『ダン、暇なんだろう？』

女性は腰を下ろし、ニヤリと笑い、男を見つめる。

『暇じゃねえよ、俺は忙しいんだよ』

『さつき、暇だって言ってたじゃない』

『ていつかなんで、お前がここにいるんだよ、アリサ』

訝しげな表情で、男は目の前の女性を見つめる。

『仕事よ、し・ご・と』

リディアから頼まれてる事があるから

その用事をしてる所よ』

『なんだよ、用事って』

ていうか、俺もリディア様から大切な用事を

任されてて忙しいんだよ

ほら、あっちいけ、しっしっしっ』

もうお前には用はないと、男は追い返すように手を振る。

『用事って、聖剣の勇者様とやらの案内役でしょ？』

『なんで、お前がそれを知ってたんだよ』

不満気な表情で、目の前の女性を男が睨みつける。

『私も似たような用事を頼まれてるから』

それで、どうなの？聖剣の勇者様ってやつは、強いなの？』

『あん？そりゃあ、お前、強いってもんじゃねえぞ！』

特に聖霊つてやつは、こっ背中から火の翼がブワァーっとなつてさあ、

首がビューンっとなつて伸びて竜になつてさ、

火をブワァーっとなつて吐いて威嚇するんだぜ！

詠唱無しで、あんなめっちゃくちな魔法するやつは見たことねえぜ！』

嬉しそうに赤髪の男は、黒髪の少年と行動を共にした時の事を話す。

『なるほどね、ダン

さつぱり分からないわ

とりあえず、一発殴つて良い？ていうか、殴る』

『へっ？くはっ！？』

そう言つて男はいきなり目の前の女性におもいつき殴られ、荷馬車から転げ落ちる。

『てめえ！何しやがんだ、コラッ！』

『何しやがんだじゃねえよ！』

人様に説明をする時は、相手に分かりやすく説明しろつてんだろ？』

そう言つて、蒼髪の女性は荷馬車から飛び降りてくる。

『とりあえず、リディアに報告書を書かないといけないから、ついて来い！』

後、この街で調べ物するから、お前もとりあえず付き合え、暇なんだから？』

男の首根っこを捕まえ、女性は男を無理矢理連れて行く。

『ふざけんな！おい、ババァ！』

『誰がババアじゃ、ゴラア!!』

メゴオオ!!

『ぐぼお!?!』

女性から振り下ろされた拳が、男の顔面に勢いよく当たり、鈍い音を放つ。

『まったく、死んだ人間の搜索なんて、どうやってやれば良いのよ?』

とりあえず、最近よく噂になってる、死んだ姫様の亡霊が街で出るっていう

情報から調査しに行くよ! って気絶してるし!?!』

そのまま気絶した男を、あきれた表情で見下ろした後、まあいつかと言って男をひきずりながら、街に連れて行く。

第12話 情報屋のスィ

3年前

ベッドの上で眠る一人の女性。

頬はひどく痩せこけ、一見すると老婆のようにも見える。

(ひどいものだな……たった一ヶ月で、ここまでの状態になるとは)

自分の体の状態を確認しようと上体を起そうとするが、予想以上に力が入らず、
すぐにあきらめる。

(力を求めるあまりに、例の教団に接触した結果がこれか……)
くやしきのあまり歯軋りをしようとするが、口元にも力が入らず、
それもあきらめる。

(人の魂をも弄ぶ、禁忌の闇の魔法か
なるほど、この世界に伝えられていないのも納得できる)

どこからともなく吹いてきたそよ風が、女性の肌をなでる。

(だが、それも今となつては、もはや何もかもがおそい)

私は奴の手の平の上で、もて遊ばれ、

後は、このまま朽ち果てていくのみ)

女性の眠るベッドの傍らに、何者かの気配がする。

眠っていても分かるぐらいの強烈な魔力に、女性は心の中で苦笑
する。

(暗殺者を雇ってきたか)

好きにしろ、今の私には、何の抵抗もできぬ)

女性の唇に何かに触れるような感触がして、口の中に何かの液体が流れ込んでくる。

(毒か……証拠を残さぬ良い手だな)

私もよくやったものだ)

その者が流し込んだ液体を受け入れ、私にはお似合いの末路だと苦笑する。

だが、次の瞬間には驚き、女性は閉じていた目を開く。

(どういう事だ？体に力が入る)

液体が体中に染み渡り、朽ち果てていくだけだった体の急激な変化に驚き、

女性はよろよろと上体を起こす。

黒に近い紫色の瞳が、ベッドの傍らに立つ者を見つめる。

『お前は何者だ……』

女性の問いかけに、透き通るような蒼い瞳を持つ少女が微笑む。

}\
}\
}\

居酒屋 マイメイド 人魚姫？

眉をひそめ、黒髪の少年は建物の前にある看板を読む。

『心配しなくても大丈夫よ』

お酒を飲まなくても、食事くらいはできるわよ』

少年の心配事を悟ってか、蒼髪の少女が苦笑する。

『ほら、入るわよ』

『うーん……まあいつか、こんちわー』

未成年だけど大丈夫か？、と不安になりながら少年は店に入る。

『あつ、いらっしやい』

あら？、スイじゃない、まだ日も暮れてないのに、えらく早いわね』

店内に入ると、この店の人らしき女性が笑顔で出迎える。

『今日は、お客さんが早く見つかったから』

早めの出勤よ』

『夜の準備はこれからだから、今はお昼ご飯しかだせないわよ？』

『おそめの昼食を食べに来ただけだから、大丈夫よ』

困ったような表情を見せる女性に、少女は笑顔で答える。

『あらそつなの？まあ、ゆっくりしていきなさい』

『あそこに座りましょ』

そつ言つと少女はカウンターの席に座る。

(うーん、なんかこの人の衣装、どっかで見たことあるような) 出迎えた女性の衣装に釘付けになりながらも、少女の隣に少年も座る。

(なんだっけかな?)

チャイ………なんとかドレスだっけかな?)

歩きたびにサイドスリットから太ももが見え隠れし、体のラインを強調させるようなその独特の衣装の名前を、思い出せそうで思い出せない状況に

腕を組み、うーんと少年はうなり声を上げる。

『めずらしい服でしょ?』

フウコク 風国のドレスよ』

女性を食い入るように見つめる、少年の視線に気付いたのか、スイと呼ばれた少女が答える。

『この店はね、この街ではめずらしく』

フウコク 風国の郷土料理が食べられる店なの

エレナは………たしか昔、フウコク 風国に住んでたんでしょ?』

『そうよ』

『ご希望があればこちらでは食べられない』

米を使った料理も作れるわよ』

そう言うと、少女からエレナと呼ばれた女性は、米が入った袋を少年に見せる。

『え?米?』

米が食べられるんですか?』

こつちの世界に来てから、今までパンを主食とした食事ばかりだったので、米料理は

あきらめていたのだが、まさかの米という単語を聞き、少年は驚きの表情を見せる。

『あら？水国の事は良く知らないのに、

風国の米料理は知ってるの？

あなた、風国出身だっけ？』

少年の特徴的な黒髪と黒い瞳を見て、蒼髪の少女は不思議そうな表情をする。

（えっ？米料理で出身とかバレるの？

まずったなあ……：：：：：そういえば、出身を聞かれた時の適当な話を考えてなかったなあ）

『フッフ、まあ良いわよ

あなたの事はこれから色々聞くことになるから

先に注文しましょ、それで？米料理にするの？』

さて、どう答えたものかと頭をかき、悩みだした少年に少女が苦笑して

注文を尋ねる。

『あつ……じゃあ、米料理でお願いします』

『エレナ、私もそれをお願いするわ』

『分かったわ、ちよっと待っててね』

そう言って、女性が厨房に入っていく。

『それじゃあ、改めて自己紹介をするわね

私はスイ、この街では情報屋の仕事の一つとして、主に観光案内をしているわ』

『タクヤです』

『タクヤね、

それで？私を雇う気になってくれた？』

『うん、やっぱり、ちょっと高いんですけど?』

『そんなこと無いわよ、このあたりではそのくらいの値段が普通』
『よ』

水差しを手に取り、コップに水を注ぎながら少女が答える。

『でも、そうねえ』

君みたいな子供だと、やっぱり高いのかな?』

『子供って、俺18なんですけど……』

子供と言われてムツとした表情で少年は少女を睨む。

『ちなみに、私も18なんだけどね』

(えっ? 同い年?)

驚いた表情で少年が少女を見る。

『怒っちゃった? ごめんなさい』

それじゃあ、お詫びのしるしに……』

少女はそう言った後に、口をモゴモゴさせ、コップに唇を近づけ、
そしてなぜかコップを隠すように少年に背を向ける姿勢で何かをし
た後に、

少年に姿勢を向き直す。

『はい、どうぞ!』

うれしそうな表情で少年にコップを差し出す。

『いや、どうぞじゃないですよ!?』

さつき、それに睡入れてたでしょ?』

『あら? 何で分かったの?』

ちゃんと隠してたのに』

不満そうな表情で少女は少年を見つめる。

『いりませんよ、そんなの』

嫌そうな顔で少年は少女から差し出されたコップを返そうと手を伸ばす。

『えっ？私の世界では、じ褒美です？』

『言ってますん！』

どうしたらそんな風に聞こえるのか、嬉しそうな表情で少女がコップを

少年に握らそうとする。

『あら、良いの？そんな事を言って

ちなみにこれを飲むと、契約料が無料になるって言ったらどうするっ？』

『えっ？』

思わぬ言葉に、少年の動きが止まる。

『これを飲まずに、私の指定した契約料で私を雇うか……』

『っっ……』

怪しげな笑みを浮かべ、少女がコップを少年の顔に近づけてくる。

『それとも、私の唾液入りの水を飲み、無料で私を雇うか……』

（いや、これ飲むと同時に変態の称号も手に入れるんじゃない？）

『さあ！どっち！？』

（しかし、これを飲めば無料になるのなら……）

悪魔のようなささやきに、思わず少年の手がコップに伸びそうになる。

（あら、めずらしいわね

男はふてくされた表情で、文句を言う。

『計画って言っても、どうせその金使って、女のいる店に遊びに行くだけでしょ？』

(ぎくっ！なぜ、ばれた!?)

ベッドの上で頬をつきながら、女性がニヤつく。

『私に隠し事をしようだなんて、100年は早いよ
ダンはずぐに顔に出るからね』

はあとため息をつき、男はそばにあつた椅子に腰掛ける。

『それで、さっき話してた幽霊とやらはいったい何なんだ？
幽霊なんかと会ってどうするつもりだ？』

『あゝ、死んだ姫様の亡霊が街に出るってやつ？』

『お前、本当にそんな話を信じてるのか？』

女性が馬鹿にした表情で男をみつめる。

『はああ？さっき、お前いろんな人に聞き込みしたりして、
真剣に探してたじゃねえか？』

『あん？私の探し物は幽霊じゃないわよ』

『その幽霊とやらの噂を流してるやつの方よ』

『なんで、そんなやつを探してるんだよ』

『もちろん、何でそんな自分の身を危険にさらすような情報を
流してるかを聞くためよ』

『危険？ああ、まあ、確かに危険っちゃあ、危険だなあ』

男が何かを納得したように頷く。

『そもそもの始まりは、3年前のミステリア姫の失踪事件』

『あゝ、公式発表では行方不明って話だけど、』

『でも、あれって噂だと暗殺されたって話だろ？』

『しーっ！この国ではその言い方は禁句よ

気をつけなさい』

『分かってるよ、下手すれば毒姫に、俺も暗殺されるかもしれないからな』

男をたしなめる女性の意図を、見透かしたように男が笑う。

『あんたの怖いもの知らずな所は良い事かも知れないけど話す内容には気をつけなさい』

『わ、分かってるよ、そんなに睨むなよ、アリサ……』

『すぐみを効かした女性の睨みに、怖いもの知らずの男も、おもわず怯む。』

『まあ、でもその噂もあながち嘘じゃないかも知れないけどね

ミスティア姫の失踪事件をきっかけに、直系の王族の血を持つ

者が

次々と亡くなっていった話は知ってるでしょ』

『知ってるよ

そして、残ったのが第一皇女である

サリティア姫』

『証拠は何一つないけれど

誰もがその王族達の死に疑問を抱いたわ』

『そして、その証拠を掴もうとして

探りを入れようとした者達も次々に行方不明になっていったと』

おー怖い怖いと大げさな仕草で男が両手をあげる。

『一ヶ月と言う期間で大量の人間が亡くなったわ

それ以降、彼女に逆らおうとする者は誰もいなくなった』

『それ故に公には呼ばれてないが、毒姫とまで呼ばれるようになったと』

『そうよ』

『そして、その亡くなった連中の恨みつらみが募って
姫様の亡霊が街に出るようになったと……』
男はニヤリと笑い、恨めしやくと両手を前に出す。

『んなわけあるかつ!!』

メゴオオ!!

『ぬじお!?!』

女性から振り下ろされた拳が、男の頭に勢いよく当たり、鈍い音を放つ。

『イテテテ……冗談じゃねえか』

頭を抱えながら、うずくまる男を見下ろしながら、女性は物思いにふける。

(しかし、この噂に関しては妙に具体的な目撃情報が多いのよね
ダンが言うように幽霊がいるとは思えないし
うーん、まさかねえ……)

『まあ、難しい事はまた明日考えれば良いし、私は寝る!』
そう言って、女性は布団に潜り込む。

(本当に勝手な女だよなあ……
くっそう、こいつのせいで死んだら、化けて出てやる!)
ブツブツと恨み事を言いながら、男も自分のベッドに潜り込む。

第13話 水の聖霊（前書き）

変態について真面目に考察していたら
ゲシュタルト崩壊してきた

あばばばば

第13話 水の聖霊

『しかし、物々しい雰囲気だな

何をおっぱじめるつもりだ？』

赤髪の青年が訝しげな表情で、物陰から森を囲むようにして立つ兵士達の様子を見つめる。

『おかしいわね、いつもだったらここの警備にこれだけの人数は、割いていなかっただけだ』

青年の隣にいる女性も、腰をかがめその様子を見つめる。

『本当にタクヤ様が、この中にいるんかねえ？

蟻の子一匹、入れやしねえじゃねえか』

『聖剣の勇者君が泊まってる宿屋の主人に聞いたら

レイティア湖を見に行ったって言ったんでしょ？』

女性が男に視線を移す。

『でも、レイティア湖って、たしか3年前から規制が掛かって、一般人は入れないはずじゃなかったかしら

今、あそこに入るのが許されるのは、王族とかだけでしょ？』

女性が眉をひそめ、男に問いかける。

『そんなことは知ってるよ、だから同じ事を宿屋の親父に聞いたらそこに入る許可を持つてる人が見つかったから、見に行くんだってさ』

『許可もってるやつって誰？』

『情報屋のスイだってさ』

『そっちが来たか』

女性が苦虫をつぶしたような表情をする。

『スイは確かにこの街じゃ、情報に関しては信用のできるやつだ
けど』

『後ろについてるのが毒姫って噂があるってんだろ？知ってるよ』
女性に視線を移し、男も苦虫をつぶしたような表情をする。

『だったら、何でそんなやつに聖剣の勇者君なんかを預けたのよ』
『昨日は、泊まる宿が見つかったって話だけしか、しなかったんだよ』

『はあ、まったく詰めが甘いねえ……』

もし、今回の事で聖剣の勇者君に何かあったら、リディアにど
つかれるのは

あんただよ？』

『うっせえ、分かってるよ』

文句を言いたいのは山々だが、自分にも落ち度があると分かっ
てるため

男は渋々といった表情で視線を兵士達に移す。

『万が一っていう事もあるからなあ、とりあえず様子見がてらで、
こっそり

中に入りたんだけど』

『何人か、ぶつとばして中に入るか？』

女性が自分の顔の前で拳を握り締め、ニヤリと笑う。

『バーロー、こっそりって言っただろ？』

アリサはすぐにそうやって、力で解決しようとする』

『冗談にきまってるだろうが！』

ゴスッ！！

『いぶっ！？』

女性から放たれた拳が、男の腹に突き刺さる。

『てめえ、この暴力女が……』

『冗談だったんですか？』

『そうよ、冗談よ……ってアレ？』

女性が不思議そうな顔で、腹を押さえてうずくまる男を見つめる。

『こっちです』

『！？』

突然声を掛けられ、反射的に男と反対側に視線を移すと、

腕で膝を抱えるようにして、腰をしゃがめた蒼髪の少女がこちらを見上げていた。

(いつの間に……?)

驚いた表情の女性と少女が、しばし見つめ合う。

『ティアアです』

小さな少女がニコリと笑う。

『あのお、今日は湖は大変危険なので、近づかない方が良いと思いますけど』

(私が、こんな子供に背後を取られるなんて……)

一見すると、その少女は10歳にいくかいかないかと言う感じで、地面に

届きそうなくらいの長い蒼髪に、青い瞳を大きく開けて、女性を困惑した

表情で見つめる。

『あのお、聞いてますでしょうか？』

『お譲ちゃん、心配はいらないぜ』

俺達はかなりの凄腕の人間でね、二人揃えば1000人くらい
ちよちよいのちよいつてやつだぜ！』

（何がちよちよいのちよいだ、阿呆

子供の前だからって調子に乗りやがって）

じゃあ、お前一人で1000人相手にして来いと呆れた表情で、

女性が

男をみつめる。

『1000人ですか、それは困りましたねえ……』

男の冗談交じりの言葉に、なぜか少女が本当に困った表情をする。

『でしたら、戦いには参加せず、遠くから見ただけという条件で
湖には近づいてもらえないでしょうか？』

『どういう意味？』

少女の謎の言葉に、女性が訝しげな表情をする。

間に

『ちなみに、もう少ししましたら、あそこにいる人達が交替の時
なりますので、その隙に森の中に入って頂くのが、安全だと思
います』

少女が指を指した方向に、二人が視線を移す。

『なんで、お嬢ちゃんがそんな事を……あれ？』

男が振り返った時には、少女の姿は既に無くなっており、男が驚
いた表情で

辺りを見回す。

『消えた？えっ？えっ？』

おい、アリサ、さっきのお譲ちゃんはどこ言った？』

『さあ、どこだろうねえ……』

女性は先ほどまで少女がいた所を、訝しげに見つめ、それに触れる。

(土が湿ってる……さっきまでは無かったはず)

『おい、アリサ！』

なんか兵士達が移動してるぜ、もしかしたら本当に交替するかもしれないねえ

行こうぜ！』

ダンネが立ち上がり、アリサもそれに追従するように後を追う。

(さっきの子供、どこかで見た顔よね)

それに、さっきの湿った所から、微かだけど魔力も感じたわ)

『なんか良く分からんけど、ツイてるぜ』

急げば、タクヤ様にも追いつくかもしれないぞ！』

嬉しそうな表情で男は兵士達の隙を突いて、森の中に入っていく。

(ミスティア姫の幽霊って、もしかして……)

アリサは何か気付いたような表情をした瞬間、男を追い抜き、森の奥に

向かって勢い良く駆けていく。

『早っ！アリサ！』

ちよっ、待っ！』

男も引き離されないように、女性の後を急いで追いかける。

それでも、気になるものなのですか？』

『それは、気になるよ』

もし、自分が助けられる力があるなら、助けてやりたいと思うのが

普通じゃないのか？』

『主様は、お優しいんですね』

少年の答えに、少女が微笑む。

『ごくろうだったな、スイ』

突然、二人に何者かの声が掛かる。

振り返るとそこには、こちらに歩み寄ってくる一人の女性。

腰まで届く長い蒼髪をなびかせ、足に悪い所でもあるのか、杖をつき、

若干心許無い足取りでこちらにフラフラとしながら近づいてくる。

そして、その女性に追従するかのように森の中から、たくさんの兵士と

思われる人達も現れる。

『サリティア、あまり無理をしてはいけないわよ』

蒼髪の少女が心配そうに、その女性に近づき、体を支えようとする。

『フン、ぬかせ』

スイ、あれがお前の言った、聖剣の勇者と言っやつか？』

『そうよ、彼が光国ユウコクで噂になってる、聖剣の勇者様』

『ククク、竜姫もこんなやつを懐に隠しておいて』

何をするつもりかな……まあ、いい』

女性は視線を後ろにいる兵隊に移し、目配せで何かの合図を送り、兵が頷く。

『やれ』

『はっ！弓兵部隊、前へ！』

ザッザッザッザッ

その兵の号令で、兵達が前に歩み出てくる。

『サリティア、本気でやるの？』

『当然だ、聖剣の勇者というのが、どれ程の実力を持っているのか、

確認する必要がある』

『やめといた方が、良いと思うけどね』

蒼髪の少女がため息をつきながら、サリティアを見上げるが、その視線の先の女性は気にした様子も無く、鋭い視線を湖の前に立つ少年に向け続ける。

『全体、構え！』

指揮を執る兵の号令で、兵達が手に持っていた弓を少年に向けて構え、

詠唱魔法を唱え始める。弓兵達の持つ弓が次々と水魔法に包まれていく。

それに呼応するかのように、突然、少年の背にもつ長剣の鏢つばにはめられた

紅色の石が輝きだす。

『くるか……』

サリティアの言葉と同時に、少年の背にある長剣から、炎が左右

に走り、
巨大な翼となる。

『サリティア様……』

兵隊の中に、あきらかな動揺が現れる。

『うるたえるな、こちらにはスイがいる』

『ちよつと……あたしにふらないでよね』

不満そうな顔で文句を言う少女の視線を、サリティアは怪しげな
笑みで

受け止める。

『やれ』

『はっ！撃てッ！』

弓兵部隊から一斉に、水魔法の加護が付いた矢が放たれる。

ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！

矢が放たれると同時に、炎でできた巨大な翼が、少年を護るかの
ように

その翼を閉じ、少年を包み込む。

四方八方から飛んできた無数の矢が、その翼を次々と貫いてく。

『どうした、火の聖霊と言うのはこの程度か？』

その光景にサリティアはクスクスと笑い、隣にいる蒼髪の少女に
視線を移す。

『いいえ、むしろ大変なのはこれからよ』

『!?!』

突然の強烈な殺気に気付いて、サリティアが少年に視線を移す。

ドオオン！！

次の瞬間、巨大な爆発音と共に、少年を護っていた翼の周りを、巨大な火柱が空高く舞い上がる。

『何事だ……！？』

炎の中から現れるは一匹の竜、その姿は火で形を作っており、巨大な翼を広げホバリングをしつつこちらを見下ろしている。

『火竜！？……聖獣召喚か、やりおるわ！』

先ほどの余裕の笑みから一転、女性はひきつった笑みを浮かべる。

『オオオオオオオオオオオオ！！！！』

鼓膜が裂けんばかりの、その咆哮から放たれる強烈な熱風と殺気に兵達がたじろく。

ドオオン！！

次の瞬間、再度、大きく開けたその口から、巨大な火の玉が放たれる。

『……！？』

火の玉は狙い済ましたかのように、サリティアの元にゆっくり飛んで来る。

『サリティア様！？』

『チツ！！』

女性はせまってくる巨大な火の玉を見て、舌打ちするが、杖をつき走る事も

ままならぬ体なため、ただただその場に立ち尽くす。

何人かの兵士達がサリティアを護ろうと水魔法を唱え、巨大な火の玉に当てるが
その勢いは衰えない。

『だから、言ったでしょ？』

やめといた方が良いつて』

立ち尽くす女性を護るかのように、少女がその前に立ち、両手を前にかざす。

広げた手の平の前に、水が集まり凝縮されていく。

『いくら水の魔法が火の魔法に強いと言っても、貴方達の魔法程度じゃ

焼け石に水よ』

蒼髪の少女の前に来た水泡から、巨大な水柱が射出される。

巨大な火の玉と水柱が衝突し、しばらく均衡を保つ。

『まだまだ』

余裕の笑みを浮かべる蒼髪の少女の両手が、何かを包み込むように閉じる。

それに呼応するかのように、火の玉と衝突していた水柱の先が広が
り、

火の玉を包み込む。

バシューウウウウー！！

しばらくした後に、巨大な水泡に包まれた火の玉は、その勢いを衰えさせ、小さくなり、消失する。

『まったく、聖霊というやつは、どいつもこいつも化け物揃いな』

女性の視線の先にいる少年の頭上を飛翔する火竜とその少年の前に仁王立ちする赤髪の少女を見て、サリティアは苦笑する。

『あれでも手加減してくれてる方よ、本気でやろうとしたら、たぶん、

もっとたくさん、火球の嵐がこちらに来てるわよ
私でも止めきれないくらいのがね』

こちらに振り向き、笑みを浮かべながら答えるその台詞に、サリティアは
思わず身震いをする。

『さすがに攻撃魔法に特化してない水国では、スイコク
聖霊を相手するのは、荷が重いか……』
若干疲れたような表情で、サリティアはその場に座り込む。

（はあ、ていうか事前に打ち合わせてなかったら、もっと大変な事に
なってたわね。最初の予定では火竜を出して、適当に脅かすだけの
はずだったのに……）

スイは少年の前に立つ、一人の少女に視線を移す。
その顔はまだまだやりたりないと言った感じで、怒りに満ちており、

終始こちらを睨み続けている。

次の瞬間、長剣の鍔にはめられた紅色の石が輝き、その光が少女の姿となつて少年の前に現れる。

『では、私めが主様のお背中をお流ししましょう』

『遠慮します』

『まあ、そんな遠慮なさらずに』

体の隅々まで、私めが洗ってさしあげます

特にお股の辺りなどは念入りに、グへへ』

『グへへ、じゃねえよ』

口元から流れ出る涎を、手で拭う仕草をする変態を

呆れた表情で見下ろす。

(出来ることならば、他の聖霊はまともなやつであつて欲しいな)

その願いが叶う事を祈りつつ、ふと、少年は手に握っていた水筒に気付く。

(ああ、そういうえば、スイさんから水筒もらつてたんだっけ?)

先程の少女とのやりとりを思い出し、ため息をつく。

契約料が無料になる条件と言われて、なぜか少女の唾液入りの水を飲む

という、罰ゲームなのか何なのかよく分からない条件に、終始悩んだのだが、

結局飲む事は断ってきた。

しかし、少女は諦めきれないという表情で店にあった水筒にその水を移して、

明日まで待つから飲む気になったら飲んで下さいと、無理矢理その水筒を

渡してきたのだ。

(ていうか、これって、このまま捨てれば飲んだことになるのかな?)

『火霊、これやる』

『えっ? 何ですか、それ』

不思議そうな表情で、火霊が少年から手渡された水筒を受け取る。

(とりあえず、喉かわいたから、俺はこっちの水を……)

少年は部屋に置いていた水差しに気付き、その水をコップに注ぐ。

『私は、水は飲まないんですけど……ん?』

困惑した表情で火霊が水筒の蓋をあけ、何かに気付いたように水筒の中の匂いを

嗅ぎ、水筒の中をじっとみつめ、水筒の水を一気に飲み干す。

横目でその様子を身ながら、少年もコップに入っていた水を飲み始める。

『むっ!?!』

『ブフォオ!?!』

突然、火霊の口内を何かが暴れるように激しく動き、それに合わせて火霊の頬が

上下左右に膨らんだり、縮んだりする。

『えっ? 何? 何?』

突然の事に驚いた少年が水を噴き出し、危険な物から逃げるように後退する。

『ぶおふえっ!』

ベチャツ!!

火霊の口から吐き出された水が、まるで意思をもったかのように床の上を跳ねる。

『何コレ？キモツ！？』

床の上を縦横無尽に跳ねてた水の塊らしきものが、突然膨らみ、人の形を作り出す。

『うう……まさか、そつちに行くとは予想外でした』

『えつ、何でここにあなたが……』

その見覚えのある姿に、呆然とする少年。

『主様……これ、聖霊です』

『えつ？』

火の聖霊が人の形を成したそれを、指差す。

『まさか……スイさんが、聖霊？』

『ひどいですよ、主様』

捨てるならまだしも、火の聖霊に私を飲ますなんて、

もう少しで体内で蒸発する所でしたわ』

恨めしそうな表情で少年を見上げる少女。

その瞳は透き通るように青く、短い蒼髪を手でかき上げ、深くため息をつく。

『はあ、私としたことが3年間楽しみにしていた主様との口内合体の
機会を二度も妨げられてしまうなんて、およよよ』

蒼髪の少女は悲しそうに、その瞳から流れ出る雫を手でぬぐう。

『悲しむことは無い、スイとやら、私なんかまだ主様と
手すら握らせてもらった事が無い』

(いや、この前握ってたけどね)

『一度や二度の事で諦めることはない、チャンスはあるさ
一緒に主様ぬしさまとの合体を目指そうじゃないか！

もちろん、性的な意味で』

スイの肩に火の変態せいれいが手を当て、やさしく微笑む。

(合体を目指すな……)

『おお、あなたとは噴水の前で触れた時から、何か通じ合うものを感じてたわ

そうね、また、隙について狙えば良いのよね』

スイもやさしく微笑み返す。

(隙を突くな、そして、狙うな)

『スイよ、隙をつくのも良いが、時には正面からまっすぐに
お願いしてみるのも良いかも知れんぞ』

『なるほど、妙案ね、やってみましょ！』

二人の少女が頷き合い、そして、少年のもとにやって来る。

『主様ぬしさま、お願いがあります』

蒼髪の少女がその瞳をキラキラと輝かせ、少年を見上げる。

『唾液を下さい……』

(どんなお願いだよ)

『主様ぬしさま、ついでに、私にチューを下さい』

なにがついでなのか分からないが、その隣にいるもう一人の変態せいれいが
口付けをせまってくる。

(なんだその顔は、梅干でも食ったのか?)

『スイは仮の名前でして、名前が無いと呼びづらいという事で、とりあえず国の名前から取っただけなのです』
主あるじの問いかけにスイが答える。

『主様ぬしさま、スイが欲しがってるのは主様ぬしさまが決めた真名の方です。

私達聖霊は、真名が決まってこそ、本来の力が発揮できるので
す』

（火霊がまともな事を言ってる、何か悪いモノでも食ったか？）
火の変態せいいが、聖霊っぽい真面目な発言をしてる事に、少年がひどく驚く。

『えつと、名前ねえ……』

水国スイコクの聖霊でしょ？』

腕を組み、少年がしばらく考え込む。

『よし、決めた！』

水霊スイレイ、君の名前は水霊スイレイ、どうだ？』

スイが目を大きく見開いて、少年を見つめる。

『えっ？駄目？』

プシャアアアアアア！！

『！？』

突然、目の前の少女が顔の穴と言う穴から水を噴き出す。

『喜んでるみたいですね』

『えっ？これ喜んでるの？』

（てつきり、怒ってるのかと思った、あんま俺ネーミングセンスとかないしな）

女の子として、その喜びの表現方法はどうかという疑問を持つ
リアクションに、少年は全身に水を浴びせかけられ、終始無言とな
る。

第14話 水国のミスティア姫

『主様ぬしさま、改めて紹介をします』

こちらが、水国の女王、サリティア様です』

『初めまして、聖剣の勇者殿、サリティアよ』

そう言っつて、目の前の女性が微笑み、少年に握手を求めるように、手を前に出す。

『ガルルルルッ』

だが、その少年とサリティアの間を火霊ヒレイが遮るように立ち、サリティアを威嚇する。

『こら、火霊ヒレイ、威嚇するな』

水霊スイレイがもう、大丈夫だつて言っただらう？』

すみませんとサリティアにあやまりながら、少年が火の聖霊の肩に手を当て、

後ろに下がらせようとする。

『主様ぬしさま、こいつは信用できません』

どこぞの火狐と同じく、腹に一物を抱えてるようなやつです』

『まあ、確かにいつも何か、悪巧みを考えてる人ではあるわね』

火霊ヒレイの言葉に追隨するように発言する、水霊スイレイの言葉に

サリティアが苦笑する。

『否定はできんな』

まあ良い、握手はまたの機会にしておこう』

そう言っつて、サリティアが前に出していた手を引っ込める。

『まずは、こちらからいきなり攻撃をしたことを詫びておこう。』

聖剣の勇者と言っても、今の時代ではおとぎ話のような存在でな。

どうしても、その実力をこの目で確かめておきたかったのだ』
そう言って、サリティアが頭を下げる。

『あつ、大丈夫ですよ』

今日の事は、事前に水霊スイレイから話しは聞いてましたし、それに少年が隣にいる火の聖霊に視線を移す。

『火霊ヒレイもいましたしね、そんなに問題は……うっ』

そう言って微笑む少年の視線を、火の聖霊が目をキラキラと輝かせて見つめる。

『おお、主様ぬしさま、そんなに火霊ヒレイの事を信頼して、

じゃあ、ご褒美のチューを！』

うーと口をすばめて、火霊ヒレイが主に口付けをせまる。

『調子に乗るな！』

そう言って、せまってくる火の聖霊の頭を、少年が嫌そうな顔で押さえつける。

『ゴロゴロゴロゴロッ』

『後、そこ！さりげなく、うがいにしても唾液はやらんぞ！』

『ガハッ！』

口に含んだ水を吐き、水霊スイレイが膝から崩れ落ちる。

『お前ら変態共の行動は、すべてお見通しだ、阿呆』

残念そうな表情で主を見上げる二人の聖霊を、少年が呆れた表情で見下ろす。

『クスクス、そんな行動をとる、スイを見るのは初めてだな』
その光景をサリティアが楽しそうにみつめる。

『うっ、コホン、まあ、余興はこの辺にしておいて、そろそろ本題に入りましょうか』

少々恥ずかしそうな顔をして水霊スレイが立ち上がり、湖に向かって歩き出す。

『あなたとの付き合いもこれまでよ、真名を手に入れた私の前は、

もう、あなたの思い通りにはさせないわ』

そう言って、湖に浮かぶ紫色に濁ったそれを睨みつけ、

手のひらを空に向けるようにして、両手を左右に上げる。

瞳を閉じ、なにかを集中し始めた水の聖霊の体が蒼く発光し始める。

その光は徐々に大きくなり、その光に呼応するように湖も、また、眩いばかりの蒼い光を放ち始める。

『さあ、湖よ

その邪魔者を退けなさい』

そう言った瞬間、湖が大きく波打ち始め、そのうねりは大きなものとなり、

湖に巨大な渦を作る。

湖の表面に浮かんでいた紫色に濁った液体も、渦に飲み込まれていく。

水の聖霊が、両手でゆっくりと何かを掬い上げるような仕草をする。

すると、渦の中心から大きな水泡が現れる。

『とりあえず、呪術で汚された部分はその水泡に、全て取り出し

たわ』

『これで、水国の危機は免れたという事か』

サリティアが水の聖霊の言葉に、胸をなでおろすように安心した表情を見せる。

『これで、もう心残りは無いな……』

『本当にそうかしら？本当にもう、何も心残りは無いの？』

サリティアの呟きに水霊スイレイが問い掛ける。

『どういう意味だ、スイ？』

『あれよ』

そう言って、水の聖霊が湖を指差す。

サリティアが見つめる先、湖の中心に浮かぶ大きな水泡。

そして、その傍らに、人影のような物が薄っすらと見える。

『……何だ？』

その影が一瞬ゆらいだように見えた瞬間、湖が眩いばかりに輝く。

ドクンッ！

心臓の鼓動のように湖全体が、脈打つように蒼い光を放つ。

『まさか……』

湖の光と呼応するかのように、辺りを包み込む、巨大な魔力。

その覚えがある水の加護にサリティアが後ずさる。

『ありえない、そんな馬鹿な』

徐々に大きくなるその面影に、サリティアが大きく目を見開く。

『これは……夢か？』

『夢でもなく、幻でも無い、ましてや、街で噂になってる幽霊でも無いわよ』

サリティアの呟きに、水の聖霊が答える。

幼き頃から彼女は、既に才能の片鱗を示していた。

だが、この魔力の大きさは異常すぎる。

この巨大な湖が、彼女と一つになってるかのように感じる。

(これではまるで、世界の全ての水と呼応し、操ったレイティア
姫、

そのものではないか)

水の聖霊がこちらに歩む者と共に来た水泡を操り、それを自分の
もとに

たぐりよせる。

水霊スイレイが手をかざすと水泡は見る見るうちに小さくなり、
手の平に乗る程の大きさに凝縮される。

『さんざん好き放題やってくれたわね、しばらくはそこにいなさ
い』

肩に下げた鞆から取り出した小瓶に、水泡に包まれた紫の液体を
移す。

『さて、こちらはこれで終わり』

そう言って、水霊スイレイがサリティアに視線を移す。

『サリティア、あなたには彼女の疑問に、すべてを答える義務が
ある』

『……』

『なぜ、彼女を殺さねばならなかったのか』

『……』

荒々しく叩かれるドアに向かう。

ガチャッ！

ドアを開けた先にいたのは、一人の蒼髪の少女。

『あなたがマイルズ先生ね』

『おめえ、誰だ？』

『湖の近くに診療所があつて助かつたわ、急患よ
急いで治療をして欲しい人がいるの』

蒼髪の少女が、後ろに背負つてる人に視線を移す。

『何があつたんだ・・・つて！？』

『詳しい話は後よ、彼女、お腹をナイフで刺されて重傷を負つて
るの』

『おいおいおい、嘘だろ？』

うなだれるその顔をあげさせて、男が驚く。

『ミステリア姫！？なんで、こんな所に？』

『とりあえず、彼女の血の記憶から応急処置はしといたけど。

専門的な知識は乏しいから、後をお願いしたいの』

『だつたら俺じゃなく、城の連中に早く知らせて

治療をしねえと・・・』

『彼女、お姉様に刺されたみたいなの』

『何？サリティア姫に・・・』

少女の言葉に、男の動きが固まる。

『できれば、今はこの事はなるべく秘密にしたいの。

あなたに危険が及ぶというのならば、治療さえしてくれば、
後は私がなんとかするわ』

真剣な少女の眼差しに、男が困った表情をする。

『治療が駄目というのなら、治療の仕方さえ教えてもらえば・・・』

『馬鹿野郎ッ！素人がそんな簡単できるわけねえだろ！』

さつさとそこに寝かせろ、俺が治療する』

『大丈夫なの？結構、あぶない橋を渡る事になるかも知れないわよ？』

『フンッ！そんな事は分かってるよ。』

でもな、医者って言うのはな、国とか権力とか関係無く、

そこに助けられる命があれば、

助けるから医者って言うんだよ！』

『フフフ、その台詞、彼女の記憶通りね。』

あなたに最初にお願いしに来て、正解だったわ』

傷ついたミステリア姫をベッドに寝かせ、少女は医者にすべてを
まかせた後、

壁にもたれるようにして床に座り込む。

『正直な話、私も彼女達から覗いた血の記憶を整理するので、

頭がいつぱいで、結構つらい所なのよね』

『おい、大丈夫か。』

血の記憶って何の事だ？』

頭をおさえるようにして、床に座り込む少女を見て、

男は心配そうに声をかける。

『私の方は大丈夫よ。』

まだこの世界に生まれてすぐだから、突然の事に情報の整理が
しきれてないの。少し待って頂戴、後で分かる事から説明する

から』

（見た目はただの子供だが・・・）

その少女から放たれる異常なまでの魔力に、男がおもわずたじろ

『あら、マイルズ先生、めずらしいわね。
朝早くから、うちの店に来るなんて』
女性は嬉しそうな顔で男に微笑む。

『でも、ごめんなさい、

まだ、お昼の準備はできてないの』

『今日はそっちじゃねえ、

頼みごとがあつて店に寄つたんだ』

『頼みごと？』

『・・・』

終始無言でうつむき、どうしたものかと悩む男を、女性は不思議
そうな顔で
みつめる。

『ちと、昨日、厄介事に巻き込まれてな、

とりあえず、お前に相談した方が良い話が聞けるかと思つてな』

『私じゃないと、駄目な話かしら？』

『少し、やばめな話なんだ、そのお、なんだ、

無理強いするつもりは無いんだが・・・』

男の普段とは違う様子に、女性は何かを悟つたかのような、真剣
を表情をする。

『聞かせて頂戴、その様子からして、私じゃないと難しい話なん
でしょ？』

よつぽど重大な話なのか、頭を掻き、言葉を洩る。

しばらく無言となつた後、意を決したように話し始める。

『実はな、ミステリア姫が暗殺されそうになつたんだが・・・』

『ミスティア姫が暗殺？どういう事？』

『うん、できればもう、こう言った事から足を洗ってるお前だけ、』

巻き込みたくなかったんだが・・・』

『その話をした時点で、片足は突っ込んでる気がするけど？』

『うっ・・・』

男が苦虫を潰したような表情をする。

『それで、私に相談っていうのは？』

『それを調べるのに、その、都合の良い諜報員とかを紹介しても
らいたいんだ』

『フッフ、なるほどね、そういう事』

そう言うと、エレナは自分自身を指差す。

『だったら、ここにちょうど良いのがあるわよ』

やさしく微笑む女性に、男はやっぱりかと、

顎から生えた無精ひげを乱暴に撫で、深くため息をつく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1004w/>

異世界で聖霊少女とフリーダム！

2011年11月18日05時33分発行